

農村

宮本百合子

青空文庫

(一)

冬枯の恐ろしく長い東北の小村は、四国あたりの其れにくらべると幾層倍か、貧しい哀れなものだと云う事は其の氣候の事を思つてもじき分る事であるが、此の二年ほど、それどころかもっと長い間うるさくつきまとうて居る不作と、それにともなつた身を切る様な不景氣が此等みじめな村々を今一層はげしい生活難に陥れた。

企業的な性質に富んで居た此家ここの先代が後半世を、非常に熱心に尽して居た極く小さな農村がこの東北の、かなり位置の好い処

にある。

かなり高くて姿の美しい山々——三春富士、安達太良山などに四方をかこまれて、三春だの、島だのと云う村々と隣り合い只一つこの附近の町へ通じる里道は此村のはずれ近く、長々と、白いとりとめのない姿を夏は暑くるしく、冬はひやびやと横わって居る。

町のステーションから、軒の低い町筋をすぎて、両方が田畑になつてからの道は小半里、つきあたりに、有るかなしの、あまり見だてもない村役場は建つて居る。和洋折衷の三階建で、役場と云うよりは「三階」と云う方が分りやすい。

この「三階」につく前少しの処に三つ並んで大池がある。並ん

で居る順に一番池二番池と呼ばれ、三番池は近頃まで三つの中で一番美しくい、清げな池いけであつた。四五年前から、この村と町との間に水道を設ける事の計画が一番池が有るために起つて居た。

まちかた町方

から小半里の間かなりの傾斜を持つて此村は高味にあるのでその一番池から水を引くと云う事は比較的費用も少しですみ、容易でも有ろうと云うのでその話はかなり速力で進んで、男女の土方の「トロツコ」で散々囲りの若草はふみにじられ、池の周囲に堤を築かれ堤の内面はコンクリートでかためられ、外面には芝を植えられて「この池の魚釣る事無用」「みだりに入るべからず」と云う立札が立ち、役人のいる処や、標示板の立つたはもう二年ほど前の事である。

そのために、湖の様に、澄んで広々と、彼方むこうの青や紫の山々の裾までひろがって居る様にはてしなかった池も、にわかに取り澄まして、近づき難い、可愛げのない様子になって仕舞った。

その頃、かなり一番池とは、はなれて、その岸边は葦でみたされ堤は見えない処で崩れ落ちて、思いもかけぬ処から水田に、はてしなく続いて居る。

この池の堤の裏を町に行く里道の道とも云うべきのが通じて居る。

何の人工も加えられず、有りのまま、なり行きのままにまかせられて居るので、池は、何時とはなし泥が増して今は、随分遠浅になつて居る。

けれ共、その中央の深さは、その土地のものでさえ、馬鹿には
されないほどで、長い年月の間に茂り合つた水草は小舟の櫂にす
がりついて、行こうとする船足を引き止める。

粘土の浅黒い泥の上に水色の襷が静かにひたひたと打ちかかる。
葦に混じつて咲く月見草の、淡い黄の色はほのかにかすんで行く
夕暮の中に、類もない美しくしさを持って輝くのである。

堤に植えられた桜の枝々は濃く重なりあつて深い影をつくり、
夏、村から村へと旅をする商人はこの木影の道を喜ぶのである。

二番池の堤は即ち三番池の堤である。二番池の崩れた堤は、は
るか遠く水田の中にかくれて完全に道のついて居る一方はいつと
はなしに三番池の堤の一方を補つて気のつかない間に、彼方に離

れて仕舞う。

三番池は美しい水草の白く咲く、青草の濃いのだやかな池であつた。

この池に落ち込む、小川のせせらぎが絶えずその入口の浅瀬めいた処に小魚を呼び集めて、銀色の背の、素ばしこい魚等は、自由楽しく藻の間を泳いで居た。この池は、この村唯一の慰場となつて居た。

池の囲りを競馬場に仕たてて春と秋とは馬ばかりではなく、町々の、自転車乗が此処で勝負を決するのが常である。

夏は、若い者^{ものども}共の泳場となり、冬は、諏訪の湖にあこがれる青年が、かなり厚く張る氷を滑るのであつた。此等の池の美しく

いのも只夏ばかりの僅かの間である。山々が緑になって、白雲は様々の形に舞う。

池の水は深く深くなだらかにゆらいで、小川と池の堺の浅瀬に小魚の銀の背が輝く。こうした生々した様子になると、赤茶色の水気多い長々と素なおな茎くきを持った菱ひしはその真白いささやかな花を、形の良い葉の間にのぞかせてただよう。

夕方は又ことに驚くべき美しくしさを池の面と、山々、空の広いはてが表わす。

暑い日がやや沈みかけて、涼風立つ頃、今まで只一色大海の様に白い泡あわをたぎらせて居た空はにわかに一変する。

細かに細かに千絶ちぎれた雲の一つ一つが夕映の光を真面まともに浴びて、

紅に紫に青に輝き、その中に、黄金、白銀の糸をさえまじえて、思いもかけぬ、尊い、綾が織りなされるのである。

微風は、尊い色に輝く雲の片きれを運び始める。

紅と、紫はスラスラとすれ違つて藤色となり、真紅と黄はまじつて焰と輝く。

暗の中に輝くダイヤモンドの様に、鋭く青いキラメキをなげるものがあれば、静かに、おだやかに、夢の花の様に流れる。

一瞬の間も止まる事なく、上品に、優美に雲の群は微風に運ばれて、無窮の変化に身をまかせるのである。けれ共、紅の日輪が全く山の影に、姿をかくした時、川面から、夕もやは立ちのぼつて、うす紫の色に四辺をとぎす間もなく、真黒に浮出す連山のは

ざまから黄金の月輪は団々と差しのぼるのである。この時、無窮と見えた雲の運動は止まって、踏むさえ惜しい黄金の土地の上を、銀色の川が横ぎ^よつて、池の菱の花は、静かに、その瞼を閉ざすのである。

池の最も美わしい時、この池の尊さの染々と身にしみる時、それは只、真夏の夕べの、景色にばかり、池の真の価値は表われるのである。

此の村に置くには、あまりに美しい池である。

山々の峰が白んで、それが次第に下へ下へと流れて来る毎に冬は近づくのである。

寒い——只寒いばかりの此の村の冬は只池にはる氷に若い者が

なぐさめられるばかりである。

けれ共、三月四月と、春の早い都に花が咲く頃になると、山々は雪解ゆきげの又変った美しくさを表わす。

快く晴れ渡った日、四方を取り巻いた山々の姿を見た時、誰でもその特長ある、目覚しさを讃美しないものはないのである。

雪の皆流れ落ちた処、まだ少し残った処、少しも消えない処、等によつて皆異つた色彩を持つて居る。

皆雪の流れた処は、まだ少しもとけない処が雪独特の白さで輝くのに反して、濃い濃い紫色ににおうて居る。雪がまだらに、淡く残っている処は、いぶし銀の様に、くすんだ、たとえ様もない光を放して居る。始めて一眼見た時は、ただそれだけの色である。

けれ共、その、まばゆい色になれてなおよくその山々を見つめると、雲の厚味により、山自身の凹凸により、又は山々の重なり工合によつてその一部分一部分の細かい色が一つとして同じのは無いのを見出すのである。

この様に、東北にはまれな、しなやかな自然の美は此村に沢山与えられたけれ共、物質の満足、精神的の美と云うものは、此村には十分与えられてない。絶えず、不自由に追ひ掛けられて、はじめな、苦しい生活をしなければならぬ理由^{わけ}。それは、その村人自身にならなければ分らないけれ共、氣候が悪いし、冬の恐ろしく長い事、諸国人の寄合つて居る事、豊饒な畑地の少ない事、機械農業の行われない事、などは、他国者でも分ることである。

明治の初年、この村が始めて開墾されてから、変った生活を求めて諸国から集ったあまり富んでいない幾組かの家族は、あまり良いめぐり合わせにも会わないで、今に至って居るのである。

米沢人はその中での勢力のある部に属して居る。日常の事はさほどの事はないけれ共、少し重立った事になると生国の違いと云う感じが都の者ほどさっぱりとは行かず、とけがたいわだかまりになってお互^{たがい}の一致を欠くのであった。

土地の大抵は粘土めいたもので赤土と石ころが多く、乾いた処は眼も鼻も埋めて仕舞いそうな塵となつて舞いのぼり、湿つた処はいつまでも、水を吸収する事なくて不愉快な臭いを発したり、昆虫の住居になつたりする。長年耕された土地でさえも肥料の入

るわりに良い結果は表れない様な地質である、その上に耕すのも、ならすのも、収獲するにも、工業的こうぎようてきの機械を用うる事はなく、鋤くわ、鋤すき、鎌かまなどが彼等唯一ゆいいつの用具であくまでもそれを保守して、新らしい機械などには見向きもしない有様で、それだから機械などはほとんど村に入り込んで居ない様子である。

地質がよくないとは云え、機械農業が発達きさえすれば、今までより少しは多く収獲が有るのは定まった事だろうのに、農民は、発明される機械を試用する気にならず、又其を十分利用するだけ、序的な頭脳は無いものの方が多いのでもあろう。

斯うして、荒れやすい土を耕し、意地いじの悪い冬枯と戦うにも只、昔からの伝習だの、自分の小さい経験などを頼む事ほかしない。

此処いらの純農民は、随分と貧しい生活をして居る。

養ようさん蚕は比較的一般に行われて、随つて桑畑も多い。けれ共、大業にするのではなく、副ふくぎよう業にしているのだからその利益もしれたものである。

一年の間、春、夏、秋、と三度蚕を飼つてあがる利益みいりと、自分の畑のものを売った利益などで純農民は生計を立てて行かなければならない。

表面上は立派に自由の権利を持つて居る様では有るけれ共、内実は、まるでロシアの農奴の少し良い位で地主の畑地を耕作して、身内からしぼり出した血と膏は大抵地主に吸いとられ、年貢に納め残した米、麦、又は甘藷、馬鈴薯、蕎麦そば粉こなどを主要な食料に

して居るのである。

小半里離れた町方に彼等は主に地主を持つて居た。この町はこの頃になって急に目覚ましい活動をはじめた町で、金銭の活動はにわかに、せわしくなつて来ても依然として、それ等金銭をあつかうものの頭は、金銭につかわれる方なので、驚くほど物質的な、^{かね}金にきたない町になつて来た。

そのためこの四五年と云うもの只金ばかりに氣を取られて居る町の地主等は、年貢米の一斤一合の事までひどくせめたてて、^{もと}元、半俵位の事ならそうひどい事も云わず来年の分に廻しその補いに、野菜や麦を持つて来させて居た自分等の心をあやしんでいるらしい様になつて来たのである。

四五年つづく不作と、地主等の悲しい心変りによつて苦しむ小作人は自分が小作人である事をつくづくと悲しがつて居た。

独立する資力がないばかりに、地主の思うがままにみじめな生活をさせられて子供の教育も出来ず、二度とない一生を地主に操られて、働きへらして飼殺し同様にさせられて仕舞う。

小作をしないで暮すと云う事は農民皆が皆の希望だろうけれ共、地主に飼殺しにされた親達は又それと同様の運命を子供に遺して、その苦しい境遇から脱し得るだけの能力は与えなかつた。

彼等、哀れな農民の上に運命の神は絶大の權威けんいを持つて居るのである。

泣く泣く堪えきれない不満を心に抱きながらも、暗い運命に随

うよりほか仕方はないのである。

追いかけて追いかけての貧から逃れられない哀れな老爺が、夏の八月、テラテラとした太陽に背を焼かれながら小石のまじったやせた畑地をカチリカチリと耕して居る。其のやせた細腕が疲れるとどこともかまわず身をなげして骨だらけの胸を拡げたり、せばめたりして寝入って仕舞う、そのわきから掘り返された土は白くホコホコに乾いて行く様子は都会の生活をするものの想像できないみじめな有様で、又東北のやせた地に耕作する小作男を見ないものには味われない、哀れな、見る者の胸さえ迫って来る様な痛々しいものである。

斯う云う農民の住居は多く北から南へかけ東から西へと通って

居るやせ馬の背の様な形の石ころ道をはさんで両側に並んで居る。

里道の中央が高いので雨降りの水は皆両側の住居の方へ流れ下るので、家の前の、広場めいた場所の窪い^{くぼ}所だの日光のあまり差さない様な処は、いつでも、カラカラになる事はなく、飼猫の足はいつでもこんな処で泥まびれになるのである。

小作人でも少し世襲的の財産めいたものが有るものなんかは、馬なども、たまには持つて居るけれ共、その馬小屋と云うのは、四方は荒壁で馬の出入りに少しばかりをあけて菰^{こも}を下げ、立つ事と眠る事の出来るだけのひろさほか与えられて居ないものである。空氣の流通と、日光の直射を受ける事がないから、土面にじかに敷いた「寝わら」だのきたないものから、「あぶ」や「蠅」は

目覚ましい勢でひろがって、飛び出そうにも出処のない昆虫はつかれて小屋に戻って来る馬を見るとすぐその身を黒く包み去るのである。

昼は悪い道に行きなやみ、夜は、虫共に攻められる馬は、なみよりも早く老いさらばいて仕舞うのである。もし斯う云う生活さえさせられなかったなら、この種の良い、三春馬や相馬馬はそんなに早く、みぐるしい様子にはならないだろうのに、馬までが主の小作人同様、幸でない運命を持って居る様に思われるのである。動物をつかつて耕作をする事のない此村には馬の数は非常に少ない。

往還で行き会う荷馬も、大方は、用事をすませれば、町方へ帰

るものか、又は、村から村へと行きずりの馬である。

往還から垣もなく、見堺もなく並んで居る低い屋根は勿論「草ぶき」で性悪の鳥がらちもなくついばんだり、長い月日の間にいつとはなし崩れたりした妙な処から茅がスベリ出して居て陰気に重い梁はりの上に乗って居る。外囲いは都会の様に気は用いない、茶黄色い荒壁のままで落ちた処へ乾草のまるめたのを「つめ込んで」なんかある。

こんな家に二階建のはまれで皆平屋である。家の前には広場の様な処が有って、野生の草花が咲いたり、家禽かきんなどが群れて居る。

この村人の育うものは、鳥では一番に鶏、次が七面鳥、家鴨などはまれに見るもので、一軒の家に二三匹ずつ居る大小の猫は、

此等の家禽を追いまわし、自分自身は犬と云う大敵を持つて居るのである。

人通りのない往還の中央に五六人きたない子がかたまつて、尾をあげ爪を磨いでうなる猫と、腹立たしそうにクワンクワンと叫ぶ犬を取り巻いて居る事がよくある。向いの家の猫が自家の鶏を取つた事から、気づくなつた家なんかも有つた。

家畜と云うほどの事もない、犬や猫に入り混つて叫んだり、罵つたりして暮す子供等は、夏は、女の子は短つかい布を腰に巻いたつきり、男の子は丸のはだかで暮すのである。けれ共十四五から上のにもなれば、まさか、手拭で作つた胴ぎりの袖なしだの、黒い単衣を着てなんか居る。

冬は、母親のを縫いちぢめた、じみいなじみいな着物を着て、はげしい寒さに、鼻を毒そこなわれない子供はなく皆だらしない二本棒をさげて居る。

髪は大抵、銀杏返しか桃割れだけれ共、たまに見る束髪は、東京の女の、想像以外のものである。

暗い、きたない、ごみごみした家に沢山の肉にく塊かいがごろがって居るのである。

実際、肉塊が生きて居て地主のために労働して居ると云うばかりで、智的には、何の存在もみとめられて居ないのである。

けれ共此村には、彼等農民の上に立つて居ると云つても良い半農民的な生活をして居る或る一つかたまりの人達が居る。

それは、村役場と小学校と、めずらしくも、この村にある中学校に關係ある人達の群で有る。その他、神官と、僧侶と、この村の開墾当時から移り住んで居た、牛乳屋の家族、などは、實際の村のすべての事を処理して行く上には実力が有った。

こんな人達の勢力は、実に「井の中の蛙」と云うのに適當なものである。

中学校がこんな村にある！一寸妙な氣のする事だけれ共、それは県庁が、比較的景色の好い精神的と肉体的とを兼ねたこの健康地を選^えらんだと云うばかりだけれ共、その生徒の中から此村に落される金ばかりは割合に労働なくて得られる金の唯一なものであつた。遠い村に家のある生徒は、半農民の小ざっぱりした家へ

下宿し、そのために二軒の下宿屋さえ有るのである。夏季講習が折々この村の中学で行われる時は、村中が急に、さざめき渡るのである。

それだから、彼等にとって生徒はまことに有難いものに写るのうで「生徒さん」と云う名をつけて必して呼びずてにする事はしなかつた。

源平団子と云う菓子屋はいつもこの「生徒さん」達ににぎわされ、その少しさきにある、料理屋兼旅人宿は、花見時、競馬時でなければたちよる人の影もまれである。

斯んな村にも、厳な大神宮がある。檜と杉の森を背に、三番池を見下して居る。村に置くには勿体もないほどであるけれ共、主

だつた事々が行われるにはいつも、県庁の役人が出向くのが常である。

とうに別格官幣大社になるはずではあるけれ共、資産のとばし
いばかりに今も尚、幾十年かたここに建てられたと同じ位に居な
ければならないのであつた。

それほど差し迫つた生活の味を知らない私共は、真の貧と云う
事は知らない。

精神的に慰安を受ける或る物を常に頭に置いて考えるので、金
もなく、生活に苦しんでも、不義の富をむさぼるよりは意味深い
と云う事を云う。けれ共、農民が、何の慰安もなく、確信も主義
もなく、只貧しく、只金がなく、冬の長い北の国に日々の生活に

追われて居て考える貧と云うものに対する感じは何もないのである。只、恐ろしい、只逃れたいばかりのものである。

私共の思う貧にはいつも精神的の富みがつきまとうて居る。

けれ共、物質的に精神的に貧しく金のない此等の農民の生活は実に哀れな、より所のない、一吹きの大風にもその基をくつがえされそうなものである。

(二)

村の南北に通じた里道に沿うて、子供沢山で居て貧しい小作男の夫婦が居るあばら屋がある。

町に地主を持つて居て、その畑に働いて居るのだけれ共、段々に人数はますし、ゆとりのあるほど沢山とれる年がないので、夫婦は日の出るから暗くなるまで、畑地の泥にまみれて食うためにばかり働いて居るのである。

盆、正月にも、新らしい着物は作れないと云う事だ。働いても働いてもゆたかな暮しが出来ないので、幾分かすてばち気味に、少し金が入るとすぐ何かかにかにつかつて仕舞うので、よけい切りつめた暮しをしなければならぬらしい。

私はその小作人の家のすぐの処で草を刈^かつて居る婆さんとその裏にぴったりよった処にある木の根つ子に腰を下して、膝の上に頬杖を突いて秋の初めの太陽の光に鋭く反射する鎌の先をながめ

ながら下らない話をして居る。婆さんは此処の貧亡な事をしみじみ同情する様な口調で話してきかせた。

話をきいて私はつと家の中を見たい気になり、木の根っこから乗り出して裏口から半身を家の中へ入れる様にして中の様子を見ようとした。

三尺位の入口は往来に面し裏口は今私の居る、今は何も作つてない畑地に向つて居る。

この二つの入口だけであと天窓ほかない此家の内部は屋外からのぞいた明るい眼では、なかなか見られないほど暗く陰気である。

野菜の「すえ」た臭い^{にお}と、屋根の梁の鶏の巢から来る臭いが入りまじつて気味悪く鼻をつく。

暗さになれてよく見ると、五坪ばかりの土間の一隅には朽ちた「流し」と形ばかりの「かまど」がある。

そのわきにじかに置いた水桶のまわりは絶えて乾くと云う事はないらしくしめつて不健康な土の香りとかびくささがいかにもじじむさい。

馬鈴薯と小麦、米などの少しばかりの俵は反対のすみにつみかさねられて赤くなつた鍬だの鎌が、ぼろぼろになつた笠と一緒にその上にのつかつて居る。

鶏にやる瀬戸物を砕いた石ころが「ハウサンマツ」を散きらした様にキラキラした中にゴロンとだらしなくころがつて居る。

梁^{はり}にある鶏の巢へ丸木の枝を「なわ」でまとめた楷^{はしご}子が壁際に

吊つてあつてその細かく出た枝々にはぬけは抜羽だの糞だのが白く、黄いろくかたまりついて、どつか暗い上の方でククククと牝鶏の鳴いて居るのさえ聞える。三尺ほど高く床が張つてあつて、縁へりなしの踏む後あとからへこんで、合わせ目から虫の這い出そうなボコボコの畳が黒く八畳ほど敷いてある。燃木たきぎの火花が散つてか、大小の焼つこげがお化けの眼玉の様にポカポカとあいて居る。

上りあが框がまちに近い方に大きく切った炉には「ほだ」がチロチロと燃えて、えがらっぽい灰色の煙が高い処をおよいで居る。畳の隅の「みかん箱」の様なものの上に、水銀のはげた鏡と、杓のとき櫛の、齒とこの所々ところどころかけたのがめつかりのお婆さんの様にみつともなく、きたなくころがつて居る。

壁に張った絵紙を大方はその色さえ見分けのつかないほどに、くすぶって仕舞って居て、片方ほか閉めてない戸棚から夜着の、汚いのがはみ出て居るわきの壁には見覚えのある高貴の御方の絵像が、黄ろく、ぼろぼろに張りついて居るのである。

家中見廻して何一つこれぞと云うほどのものもない、洞の様な、このがらんどで、到る処に貧^{ひん}のかげの差しただようて居るこの家の様子は私が始めて見る——斯う云う家、斯う云う生活もあるものかと思つたこの家の中に、色のやけてやせこけた、声ばかり驚くほど太い五人の子供が炉に掛つた鍋の食物の煮えるのを、この上ない熱心さで見守って居る様子は、何となしに空恐ろしい様な氣持を起させる。

私はこんな貧しい家を目前に見た事はまだ一度もなかった。鮫ヶ橋の貧民窟は聞いて名ばかりを知つて居る。

こんな子供ばかりで居る暮しを見た事もない。私はこの家の暮しは、話できて居るよりもひどいと思つた。

こんなにも道具がなくて暮す事が出来るのだろうか、子供ばかり置かれてどうするだろうか。

子供のためにも悪いだろうし、よく悪い者が入つて来ない事だ。お金なんかはどうして置くんだろう。

非常な物めずらしさで、よく見て居たいと思うともう私は婆さんの話には最早耳をかたむけなくなつて仕舞つた。

けれ共婆さんは、私が聞こうが聞くまいがかまわないと云う風

に、只一人で勝手に喋^{しゃべ}って居る。

養蚕の事を云って居た。

實際子供等は、鍋のものの煮えるのを待ちあぐんで居るらしかった。

こんなにも食べたく、こんなにも待ち遠がるほど三度三度の食事は、子供達の腹をみたすだけ十分でないのだろう。

育つ勢の盛なる子供達はたとえその度毎にあきあきするほど食べても、又その次の時には、前に一口も何も食べなかった様に待ち遠がつたり、食べたがつたりするものだけ共、その度毎十分にたべて又次に待ち遠がる子供の眼は必して、今これ等の子供達が持つて居る様な眼は持つものではないのである。

何と云う熱心な、又何と云う緊張した眼の色だろう。子供等の頭の中は、鍋のもので満ち満ちて居るに違いない。非常に、たくましい、想像力をもつてそのやがて自分等の口に入つて来るものを想つて居るに違いない。子供達はあるまり熱心になつて居るので、其の一粒さえ半粒さえ勿体ならなければならない麦を俵の外から嘴を入れてあさつて居る鶏の事に気がつくものは一人もないのである。一羽の衰えた雄鳥と四羽の雌鳥は子供達の眼をかすめて、早い動作をもつて、豊かでない腹をみたして居る。人間も鶏も食物に対する饑えたものの特別に緊張した気持で一方は一瞬間の間でも早く自分等の口に煮物が入る事を望み、一方は、無意識の間に一粒でも多く食べ様とする様子で居る。

といきなり街道からかけ込んで来た、これも又あまり豊かな生活は仕得られないらしい野良犬は、はげしい勢をもつて、その狼に近づいた様な牙をむきだして鶏の群に飛びついた。

食物に我を忘れて居た鶏共は、不意に敵の来襲をうけてどうする余地もなく、けたたましい叫びと共にバタバタと高い暗い鳥屋に逃げ上ろうとひしめき合う。あまりの羽音に「きも」を奪われたのか、犬はその後には目もくれずにじめじめした土間を嗅ぎ廻る。

この急に持ち上った騒動に坐つて居るものは立ち上り、ねころんで居た者は体を起した。一番年上の男の子は、いきなり炉から燃えさしの木の大きな根っこを持ちあげるがいなや声も立てず、

ずうずう
図々しい犬になげつけた。

犬にはあたらなかつたらしい。

けれ共、驚きのために低い叫びをあげて私の居た裏口の方へかけて来、少しの間うじうじした後、すぐ間近に居た私の足に、土を飛ばせながら畑地を彼方むこうにこいで行つて仕舞つた。

なげ出された木の根っこは、ふてた娘の様にフウフウとはげしい煙に、あたりをぼやかして居た。

その木の始末を仕様ともしず子供達は又鍋のものに吸すいよせられて元の姿にじいつとして居るのであつた。

斯うやって子供達の待遠しい時間は、ゆるゆると立つて漸く鍋の中から、白い湯気が立ちのぼり、グツグツと云ううれしい音が

し始めて、しばらく立つと一番の兄は、ヒョイと土間へ素足のまま下りて「流し」に行つた。そこには、朝のままの木「椀」がつみかさねてあり、はげたぬり箸は、ごちやごちやに入つて来た。

その椀を人数だけと箸を一本ずつ取つて「わら」で一拭したまんま畳の上へ上つて仕舞つた。

私はわきで草を刈つて居る婆さんに声を掛けた。

「ねえ、お婆さん、

どこの子供でも、あんなにはだしで上つたり、下りたりして居るの？ 誰も叱り手がないんだらうか。

「なあにねえ、お前様、桑の価は下り一方だかんない。駒屋の

親父さまあ家の畑土^{はた}は、一度も手がつかねえほどなんだし

婆さんは、桑の相場をきいたと思つて居るのだ。

私は笑うともなく唇をきゅつとまげて又子供等の方に又目をや
つて居た。

丁度その時、大きい兄は弟や妹達に、鍋の中からホコホコに湯
気の立つ薯を一つずつわけ始めて居る。

兄弟中で一番年嵩で、又、一番悪智恵にも長けて居る兄は、皆
の顔を一順見渡してから、弟達に一つやる間に非常な速さで、自
分の中に一つだけ余計に投げ込む。けれ共、その細い、やせた体
の神経の有りとあらゆるものを、鍋の中に行き来する箸の先に集
めて居る小さい者達は、どうして兄の腹立たしい「たくらみ」を

見逃すことが有ろう。

子供達の心は、忽ちたちまの内に兄うちに対する憎しみの心で満ち満ちたものと見え、一番氣の強そうな、額の大きな子が、とがった声で、

「兄あんにい、己おれにもよ。

と云った。

一番の兄は、自分の失敗に險しい目をして弟共をにらみながら次から次と出す腕の中になげたけれ共額の大きな子はまだきかない。

「お前めえの方が、ふとつてらあ。

と云つて兄の膝の前の腕からその太った円まあるい一片を箸の先に刺そうとした。

いきなり、子供の頬に、かたい平手が飛んで、見て居る者の耳がキーンと云うほどいやな音をたてた。

斯うして小さい人間共の争いは起つて仕舞つた。年上のものは力にまかせて小さいものを打ったり、突き飛ばしたり、小突いたりして、一言も声はたてず、いかにも自信の有るらしい様子ををして小さいものに向つて居る。

兄弟の中半分が叫びつかれ、泣きつかれた時、いつとはなしに「喧嘩」はやんで仕舞つた。一人が先ず始めて皆がそれにみんなつれられて働き出した「喧嘩」は一人がいやになると皆もいつとはなしにする気がなくなつて仕舞うものである。

めいめい 各々が思い思いの処に立つて、夢からさめたばかりの様に気

抜けのした、手持ちぶさたな顔をして、今まで自分等のさわいで居た処を見て始めて、折角せっかく盛り分けた薯の椀の或るものはひっくりかえり、いつの間にか上った鶏が熱つそうに、あつちころがし、こつちへころがし仕てこぼれた薯を突ついて居る。斯う云う、何とはなし重苦るしい手持ぶ沙汰さた、間の悪い沈黙を破つたのは、一番きかなかつた額の大きな子であつた。

「己おれ食うべえ。

一人何か仕だすと子供等は皆木の椀を取りあげて勝手にてんでんばらばらの方を向いて、或る者はしやくりあげながら、或るものは爪でひつかかれたみみず蛭ばれをながめながら、味もそつけない様に、ボソボソと食べ始めた。

私のわきで婆さんも見て居たものと見えて、

「あないにして食うても、美味^{うま}かんべえかなあ。何も彼も餓鬼等^{うち}の中がいつちええわ、なあ、お前様。

お前様みたいな方は、若いうちも年取りなつても同じなんべえけど、己等^ぼみたいなのは、婆^{ばば}になつたらはあ、もうこれだ、これだ。

と変な笑い方をして手を左右に振った。

けれ共、この婆には、実の子が二人もあつて皆男で今は村で百姓をして居るのだから、こんな草刈をたのまれたり、人の水仕事を手伝つたりしないで、かかり息子の家で孫の守りでも仕て居たらすみそうに思えた。

「お婆さん。何故、息子むすこの処へ居ないんだい。

私は、かなり曲つた腰と、鎌を石でこすつて居る、今にもポキーンと骨のはなれそうにかさかさの手をながめながら云つた。

「はい、お前様、うちの息子は皆正直ものでなし、けれど、此村ふうの風で、自分の持ち畑とか田がなけりやあ、働ける間うち、働くのがあたり前になつとるでない。

此の婆が、生れは越後のかなり良い処で片附かたづいてからの不幸つづきで、こんな淋しい村に、頼りない生活をして居るのだと云う事をきいて居るので、その荒びた声にも日にやけた頸筋のあたりにも、どことなし、昔の面影が残つて居る様で、若し幸運ばかり続いて昔の旧家きゆうかがそのまま越後でしつかりして居たら、今頃私

なんかに「お婆さんお婆さん」と呼ばれたり、僅かばかりの恵に、私を良い娘だなんかとは云わなかっただらうなんかと思えた。

松の木の根元にころがして置いた「負籠おいかご」に刈りためた草を押し込むと、鎌をそのわきに差し込んで、

「甚助がさあ行つて見ますべい。

と云うので、私も物珍らしい顔をして後から附つて歩いた。その時まで、私は甚助つて云う百姓の家はどれだか知らなかった。けれど、それはすぐそこに裏口のある、私が先刻さつきつから見つづけて居た子供ばかりの家であつた。遠慮もなく入つて行く婆の後から、自分も中に入つて、今まであすこで見て居たより、もつとひどい様子にびつくりした。

さつきは満足な畳だと思つて見たのは「薄縁^{うすべり}」とも「畳」ともつかないもので「わら」の床^{とこ}のある処もあり、ない処もある非常にでこぼこした見るから哀れなもので、畳ばかりではなく床^{ゆか}までベコベコになつて居た。

婆は一番年上の男の子に、

「父^{ちやん}は？」

母^{かか}は？

と云つてききながら上り框に腰をかけて炉のほだで煙草を吸つたりした。

一人の子の前がはだけて膝つ子僧が出て居るのを祖母がしてやる様に、しずかに可愛がつて居るらしくなおしてやりながら、

「お前^{めえ}さま、今まで、こんなむさい家は見なすつた事がなかつ
ぺい。」

と云つて大きな声で笑つた。

私の見なれない着物の着振り、歩きつきに子供等は余程変な氣
持になつたと見えて、誰一口を利^きくものがなくて、只じろじろ
と私ばかりを見て居る。

それをわきで見ながら婆さんは、

「ひよろしがって居ますんだ（恥かしがって居るのだ）。
と云う。」

私は、田舎の子の眼に見つめられる事にはなれつ子になつて居
たので格別間^{わるい}が悪とも思わなかつた。

「父さんや、母さんは？」

淋しいだろう？

とやさしい軽い笑をただよわせながら、一番大きい男の子に云つた。

土間に下りて、私を後の方から見て居た子はいきなり大きな声で、

「ワーツ

と笑った。

私は少しいやな気持ちになった。けれ共、再び、

「ねえ、淋しいだろう。

と云った時、

「お前の世話にはなんねえからなっし。

と怒叱^{どな}られた時ほどこいやな気持にはならなかった。先ず、あんまりの返事に私は男の子の顔を見た。上り框の婆さんの傍に立つて私を見下して恐ろしい顔をして怒叱^{どな}ったのであった。

私より婆さんの方がなお驚いたらしかった。その兎の方を振向くと一緒に手を引っ張りながら、

「何云うだ。そないな事云うものでねえぞ。
と云った。

私の心の中には、一種の「あわれみ」と恥かしい様な気持が湧き上ったのであった。

私は、ほんとうに只、親切の心から云った言葉をこんな荒々し

い言葉で返され様とは夢にも思つて居なかつた。見なれない年若な女が自分達の家へいきなり入つてきて、

淋しいだろうの

何のと云うので年上の子は何か誤解したのであつたろう。他人の親切を、親切として受入れる事の出来ない子達だと思ふといかにも「みじめ」な氣持にもなるけれ共、私の掛けた親切な言葉は、今まで、今の様な言葉で受けられた事がないので、いかにも氣の小さい、氣はずかしい様な氣持にもなつた。

私は微笑する事も出来ない様に婆さんの顔を見た。

「礼儀も何も、知^しんねえからなつし

と取りなし顔に云いながら、立ちあがつた。家の中の事に氣を配

りながら出るあとについて私も一緒に往還の方へ出ると、そこから杉並木の様な処を透して真直に見えて居る祖母の家へ足向けながら、婆さんに、

「晩にでも遊びにお出。」

と云いすてて只った一人足元を見ながら、沈んだ、重い気持で、静かに歩いて居ると小石がひどい勢で飛んで来て、私のすぐ足元で白いほこりをあげ、わきの叢にころげ込んで仕舞った。

私は本能的にすばやく身をよけてすぐ後を振向くとまだ二三間ほかはなれて居ない甚助の家の入口の家中の子供が皆重なりあつて此方をのぞき、私に怒叱つた一番大きな子は、次の石を拾おうとして腰をかがめて往還に立って居た。

私は、鋭い勢で飛んで来た小石が、袷の着物を通して体にあたる痛さや、素足から血のにじんで居る様子を男の子の態度を見た瞬間に想うともなく想った。

男の子が投げる事をやめる様になきにある杭の木を小楯に取つて、じいつとその方を見つめて居た。

体は静かに、眼は静かに、子供の上にそそがれてあるけれ共、今までに経験したことのない不安な気持は、私の頭中かけ廻つて、あの小石が男の子の手をはなれるやいなや身をよける用意さえして居た。私はいつまでもじいつと彼方を見て居た。

彼方も又、私におとらないほど、此方を見つめて居る。けれ共、とうとう二度目の石はそのまま男の子の足元にすてられ、皆家へ

入って仕舞った。

それを見ますと急に私は、頭の頂上で動悸どうきがして居る様な気がした。

それからすぐの家の門へ入るまで私は、まるで駈けると同じ様な速さで、何も考えるいとまもなく急いそいだ。祖母の顔を見るとすぐ、

「甚助の家の児うち達は、ほんとうに、いやな児だ！

と云ったつきり縁側に腰をかけて仕舞った。口に云われない安心が切り下げの祖母の姿と、さっぱりときれいなあたりの様子から湧き出て私の心に入って行つた。

私は何の不幸も知らない、世の中はいつでも親切なつもりの言

葉は、親切な様に、情深い話はその様にばかり聞かれるものの様な気がして居る。

又、それが、必してそうばかりではないのも知って居ながら、実際、自分の親切な言葉をあしした調子に返され、その上、後から小石まで投げつけられ様とは何だか不思議な様な気がした。

人にねらわれた事のない私、ああやって、形に表われた様な事で小石の^ま的にされた事などのない私はどんなに気味悪く思っただろう。私は甚助の子供の気持より、はるかに単純で臆病なのを知るのであった。

彼の子供達は、私の親切な言葉のかけに何か、たくらみのあることを想像したのだろう。

その体の良い仮面めんをかぶった悪いたくらみを深入りさせないうちに追いはらおうとしたのであろう。

私は、ちよんびりも、そう云う気持は持つて居なかつたけれども、彼等が生れるとから、両親が町の地主にいじめられ、いろいろの体の好い「毘」わなに掛けられた事を小さいながら知り、それ等の憎むべき敵は皆自分達より良い着物を着、好い食物をたべて、自分達の使わない言葉を使つて居ると云う事の記憶から、私をそれと同様のものにみなしたのであつたろう。子供達が悪いのでもないだろうし、親が悪いのでもないだろう。只生活の苦しみが子供達までそんな悲しい気持にさせて仕舞つたのである。

その根元から覆くつがえして、世の外ほかへ投げやりたい生活の苦しみは、

いつの世にあつても、人間が生活をして居る間は絶えない事であるのを思えば、生活の苦しみに打ち勝ち得る智力とそれにとまなう肉体を持たないこの子供等と同じ様な気持の人が幾百人、幾万人、また無窮にこの世に生れては死し、死しては生れなければならぬだろうと云う事も思うのである。親切を親切としてうけ入れられない事のある世の中、それは実に悲しいことである。この様な、世に出てから時の少しほか立たない私でさえ、生活の苦しみを少しも感じた事のない私でさえ、どうしても受け入れる事の出来ない裏書のある親切に会う事はかなり度々である。

子供達から云えば、私は真の路傍の人である、あかの他人である。いきなり入ってやさしい言葉をかけたのを妙に思うのは無理

ではない。けれ共、真の親切を、装うた親切と見分ける眼をふさいで仕舞った、子供心に染み染みと喰い込んだ生活の苦しみと、町の地主等を憎く思うのである。私は斯うやって長い事考え込んで居た。

家の小作人の菊太きくたと云う男が私のわきに来て、

「良いお日和でござりやす。

と低い声で呼びかけるまで、甚助の児がなげた石が足にあたつて、そこが、うずきでもする様に、苦しい、さわると飛び上るほど、痛い様な気持で居た。

菊太きくたは願ねがい事が有あつて来たのであつた。

新米の収獲ととが始ると、菊太は来るものにきまつて居ると祖母達
は云つて居る。毎年毎年欠かさず、拾時分になると一二里あるは
なれた村からここの家まで来るのであつた。

いかにも貧乏しそうな、不活潑な、生氣のない、青黒い顔をし
て居て、地蔵眉の下にトロンとした細い眼は性質の愚鈍ぐどんなのをよ
く表わして居る。

こんな農民だとか、土方どかたなどと云う労働者によく見る様な、あ
の細い髪けがチリチリと巻かつて、頭の地を包み、何となく粗野な、
惨酷な様な感じを与える頭の形恰さをこの男は持つて居るけれ共、

不思議な事には心はまるで反対である。

紺無地の腰きりの筒つつぽを着てフランネルの股もも引ひきをはいて草鞋草鞋ばきで、縁側に腰をかけて居る。紺無地の筒つつぽと云えば好い様だけれ共、汗と塵で白はくっぽくなり、襟は有るかないか分らないほどくしゃくしゃに折れ込んで、太い頸にからみついて居る。袖口は切れて切れて切れぬいて、大變長さがつまつて仕舞つて毛むくじやらの腕がニュツと出、浅く切つた馬乗は余程無理を見ると見えて、ひどいほころびになつてバカバカして居る。股引だつて膝の処は穴があいて居るし、何と云う無精な女房なんだろうとさえ思われる。

祖母は此の男に会う事をすいては居ない。

けれ共この家一さい一人手で切り盛りして居るのでいやでも応でも、会わせられるのであつた。厭きらわれるのは願ひ事がきまつて居るからもあるし、それにあんまり愚痴つばいからでもあつた。願ひ事——ほんとにそれは幾年も幾年も前から同じ願ひ事ばかりこの男は持つて居た。小作男の願事と云えば云わずと知れた、米をまけて呉れである。

此男は、いつもいつもその願ひ事をもつて恰時分にはきつと来るたんびに皆に嫌われながらも自分の望をかなえて行く、馬鹿の様に馬鹿でない男であつた。

此の男のあずかつて居た田は、そんなに悪い地ではないらしい。他の小作男に見つもらせても、小作米だけは不作でも十分あが

る面積と質を持つて居た。

けれ共どうしたものの、毎年上るべきものが上らない。納めるものを納めないで自由な暮しをして居るかと思えばそうでもなく、甚助の家よりもつと酷い^{ひど}と云う話を聞いて居る。

行つて見た事もないから、どうしてそんな事になるのか分りもしないけれ共、毎日毎日働いて居るのに取れる筈の米の取れないのは私達では不思議に思える。

地主と小作人などはお互に都合の良い様に仕合つてうまく行きそうに思えるけれ共、実際は、なかなかそうは行かず、丁度、資本主と職工の様に絶えず不平と反抗的な氣持が混^まじつて居る。

私は菊太の顔をみるとすぐ自分等が、菊太の子供達がいやがっ

て居る地主だと云う感じが電いの様に速く胸を横ぎつて、たまらなく不愉快な、いやあな気持になった。

何も、地主だから罪人だとか何とか云うのではないけれど、其の日は甚助の家の子供を見て来たので訳もなくいやな気持がしたのである。

菊太の家の子供達も、あんなにして暮して居るのだろう。

私達が行ったらどんな顔をするだろう。

斯うした、貧しい、この頃のように不作つづきの年では余計地主と小作人の感情の行き違いが多いのである。

私はだまって菊太の話を聞こうとした。

菊太は何でもない様なポカンとした顔をしてボソボソと低い声

ではなす。

「御隠居様、

今年も亦思う通り実りがありません。

斯うして話は始まりいつはてしがつくかと思うほど長く長くつづくのである。

菊太の出来るだけの弁舌を振って、彼方あつちこつち此方、実入みいりの悪かった田の例をあげる。

処は何処で、何と云う名の小作人の田では去年の三ヶ一ほか上らなかつたとか、誰その稲は無駄花ばかりでねたのは少しほかなかつたとか、そう云う事をあきるほど云いつくしてから、

「けど、己おらの田はいい方なんだっし、

御年貢だけはありやすかない。

と云うのである。

それを云うまでも口がよくもとらないのでどもったり、「ウーウ」と云ったりする間と、茶を飲み、煙草を吸う時間が加わるので、それだけでもう、大抵の人間は聞き疲れて仕舞う。

大きな声で話すのならそうでもないだろうけれ共、低い低い声でうめく様に云うのだから、聴くものの気がめ入る様に陰気になつて来る。

それが此の男のねらい処である。自分が、口がうまく廻らない話下手だと知ってから、いつでも聞手の泣きそうになるまで、クドクドと何か云ってききあきて五月蠅うるさくなつて来るのを見すまし

て本意を吐くのが常であつた。

祖母はもうききあきて来る。

始めの中は煙草うちの火などを出してやった下女も、もう前の庭で

草の手入を始め、祖母も聞いて居ない様な顔をして「くるみ」を破わつては小さいかごにためて居る。只、今の処は私ばかりが菊太

の忠実な聞手である。菊太をつくづく見たいばかり、知りたい
ばかりに私は一言ひとことも口は利かないながら、わきに座つて居る。

話そうと思つた事をあらまし話して仕舞うと、次に話す事を考
えでもする様に、体に合わせて何だか小さい様に見える頭を下げ
て、前歯で「きせる」を不味まずそうにカシカシかみながら、黙り込
んで居る。

百姓などで、東京のものの様に次から次へと考えずに話をするものが有ったら、それは大抵善い方に利口ではないものである。

他人の事を悪し様に云い、一寸したものをちよろまかさないう位の農民は、大抵この男の様な様子をして話すものである。

菊太は沈黙の間に話の順序を組たてるのである。出来るだけ哀れっぽく、哀願的に聞える様に苦心するのである。

考えて居る間も、他の百姓の様に、故意^{わざ}とらしい吐息^{といき}をついたり、悲しい顔付をして見せるでもなく、只、ボンヤリ気拔けの仕た様に考え込んで仕舞うのである。自分の満足した考えを得るまで必して口を切らない。そんな時には、益々頬のたるみが目につき、小さい眼は倍もショボショボになって居るのである。

しばらくだまって居たつけがやがて頭をあげて、小さい庖丁をつかつて居る祖母の手許を見ながら云い出した。

「御隠居様、

御年貢の分だけは、はあどうにか斯うにか取りましたただハイ。それは確なことでやす。

けんど貧亡者は、いつでも貧亡でなし、

御年貢は取れてもはあ、去年の鬼奴おにめがまだついてやすでな。

祖母はだまって居る。

鶏も鳴かない静かな中にパチンパチンと乾いた「くるみ」のからの破れる音が澄んで響いて居る。

菊太は私を見た眼をすぐ祖母にうつして又云い続ける。

「去年は草取頃に、婆様にはあ逝いかれて、米と桶の錢を島の伯父家じげに借りさあ行こつて事ことうすましやした。悪い時にやあ悪い事べえ続くもんで、その秋にや娘つ子が死にやしたかんない。

今年は今年で、お鳥（女房の名）が指さあ、張はれもの出来でして、岩佐様さあ七十日がな通いましただ。

鎌で切った処さあ悪いものが入ったそうで、切つて二針三針縫つて膏藥くれたばかりで御隠居様、有りもしねえ錢十両がな取られやした。

少し金があればはれもの出来したり、不幸が続いたりしやして、島の伯父家しまおじげにも、お鳥が実家さとさも、不義理がかさみやす。確かに御年貢だけは取れやした。

けんど、岩佐様さあやる錢ぜにが無ねえで去年の麦と蕎麦粉を売り
やしたで、もう口あけた米一俵しか有りましねえで……

御隠居様、ほんに相すまねえでやすが一俵だけまけてやつて
下さりませ。

来年は、どうでもして返なしやすかない、御隠居様。

此事以外菊太の云う事はないのである。

幾度繰り返しても只この中の一つ二つの言葉をかえる許ばかりだけ
れ共、どんな事が有あつても、「七十日」と「十円」を抜かす様な

事は決して決して金輪際こんりんざい無いのである。何の抑揚もなく、丁度

生なまぬる暖い葛湯を飲む様に只妙にネバネバする声と言葉で、三度も

四度も繰かえされてはどんな辛棒の良いものでもその人が無神経

でない限り腹を立てるに違いない。

斯うなると、菊太と祖母は只根くらべである。つまるところは根の強い菊太がいつもいつも甘い事になつて仕舞うのが常である。

祖母は、自分の聞きともない願事に、なるたけ氣を腐らせまいと絶えず手か体を動かして居る。「くるみ」を破り切つたので、今度は茶を出して美濃紙で張つた「ほいろ」の様なものを、炉の上のせた中にあけ火を喰わせ始めた。

折々手にすくいあげて少しずつこぼして工合を見る。ザラザラ……ザラザラ……と云う音にしばらくは菊太の低い声もかき乱されるけれど、自信のある菊太はなお話しつづけ、その音が止んだ時には又、ききともないその願事が、はてしもない様に続いてい

や応なしに耳に入るのである。

煙草の火が消え、茶にさす湯が冷^{ひや}つこくなつても菊太はやめ様としない。

到々祖母は根まけが仕出す。

「お前のまけて呉れまけて呉れには、ほんとうにいやになる。いつになつたらそんな事を云うのを止めるんだろう。毎年毎年御前がいやな事をきかせない年はないじゃないか。あんまり不^ふ作で御前の手に負えない様なら、もう田を作るのをやめてもらおう。

いやな顔をして祖母が斯う云い出すと菊太は少し力づいた調子で又繰返すのである。

祖母は若い時処々を歩いたのでいろいろな言葉を使う。けれ共小作人を叱る時、商人の悪いのを怒る時はきつと東京弁を使った。ここいらでは東京弁を使う人には一種異った感じを持つ様な調子の村なので句切り句切りのはつきりした少し荒い様な東京弁は、小作人などの耳には、妙に更まるあらた氣持を起させるのであつた。

「来年きつとなすなすと云つて今までに十五俵も貸してあるじやないかねえ。

あの上積つては、とうてい返せるものではないにきまつて居る。そんな馬鹿な事は出来ない。いくら私が年寄りでも斯うして居るからには踏みつけられては居られ無い。

祖母はいろいろと強い事を云う。

田地を取りあげるとか、返せなかった時にはどうするとか云うけれ共、菊太は只、哀願を続けるばかりである。

私は、祖母の意地の悪い、菊太を眼下に見る様な様子を見ると菊太の子供等がこれを見た時の気持を想像した。

自分の父親は、女年寄の前に頭を下げてたのんで居ると相手は、つけつけと取り合わない様にして居るのを見たら、訳もなく、女は己より目下なものの、弱いものと云う感じを持って居る子供等は、^{おれ}どんなにくらしい気持になるだろう。私は菊太の男の子に十三より上のがないと云うのが何だか心安い。他人が聞いたら笑う事に違いない。^{ひと}

あんまり空想的な事だとは思うけれ共、両親の苦しめられると

思う心がつのつて小作の十八九の無分別な児こが、鎌を持って待ちぶせたと云う事を聞いた事を思い出すと、何だかそんな気になるのである。

他人ひとの身ばかりではなく自分自身にも、甚助の児が小くてよかったと思つて居るのである。

祖母は次の間に入つて暫く筆筒の引出しを開けたりしめたりして居たが、出て来た時には手に帳面を持つて居た。

帳面を始めつから繰つて見て渋い渋い顔をした祖母は、

「今度で十六俵だよ。

と云いながら、何とはなし重々しい様子で菊太の前に箱ずりとその帳面を置いた。

菊太は幾度も幾度も頭をさげて、乾いた筆の先を歯でつぶしてうすい墨を少しつけて蚯蚓みみずの様な、消え消えな字をのたくらせて井出菊太と書いた下へ拇指を墨につけて印変りにする。

その間、祖母は一言もきかず、菊太の前にしやがんでのろのろと動く手先から、まっ黒になった指を腰の手拭にこすりつけるまで見つめて居る。

書き終えて祖母の前に出すと一通り見てから、

「良い眼でよく見て御呉れ。」

と私に渡す。進まない様に手をのばして遠くの方で見て「いいでしょう」と云つて祖母に返すと、すぐ元の場合に仕舞いに行く。

菊太は、自分の希を叶えてもらつた嬉しさに何となく輝いた顔

になつて、身輕に立つて女中に消えた火をなおしてもらつたり、茶をつぎなおしたりする。

祖母は氣の毒なほどいやな顔をして炉の四辺にまわり艶つやぶきんをゆるるとかけたり、あっちこっちから来た封筒を二つに割つて手拭反古を作つたりして菊太の歸つて呉れるのを待つて居る。

あきるほど茶をのみ、煙草をふかしてから、

「御暇おいとまいたしますべえか、

ほんとに有難うござりました。

来年はきつとなしますかかない。

お鳥もはあ、さぞ喜びますべえて、

お嬢様もはあ、有難うござりやした。

と腰をあげる。腰を塵を取る様にパタパタと叩き三つ四つ頭をさげて土間の女中にまで何か云つて庭の入口の竹垣に引っかけて置いた、裾の切れた、ボタンもない黒ラシヤの茶色になった外套のお化けの様なものをバアツとはおつて素頭でテクテクと歩いて行く。

中高な門内の道を出ると菊太はチョイと振り返つて草の両側に生えて居る道を、ポコポコと小さいほこりの煙をたてて帰つて行く。

甚助の家の方へ曲る頃、祖母はありつたけのくさくさを私に打ちあける。

やさしく仕て居ればつけ上り、きびしくすればろくな事を仕ず、

小作人なんかはしみじみ使いたくないものだと言う。菊太の女房はこの上なしのだらしなしやで、針もろくに持てず、甲斐性のない女だと女中まで、くさいものが前に有る様な顔を仕て話してきかせる。

「菊太爺さんもずるい爺様ですない。

いつもいつも、どうにかして無理を通して行く。御隠居様も今度は、どうしても許してやらなけりやあ、いいですつぺ。

女中がこんな事を云つても、

「ああほんとうにそうだよ。

と云ったぎりその日一日祖母は、菊太の声と顔付とを眼先に浮べていやな思をするのである。

夜、湯に入りに来た構内かまえの家を貸りて居る小学の校長をつかまえてまで今日の菊太の事を話した。

「どうもなかなかうまくは行かんもんですてね。

と云いは云ったが、菊太をけなすでも祖母に味方するでもなく氣のない顔をして、飯坂の力餅をもじやもじやの髯の中へ投げ込んで、やがて「お寝み」と云つて歸つて仕舞つた。

「ほんとうに小作男なんか使うのが間違いだ。ああ、ああ、けつぱいけつぱい。

床に入つてまで祖母はつぶやいて居た。よつぽどいやだと見える、氣の毒な。

田地の事、作物の事、小作男の不平やら、思わしい収獲を得な

い田畑の物などの話は聞いても、それは只、話す人の気休めのために話すので私に相談する事はない、私の聞いても喜ばない事は聞かずに居られる、幸福な事だ。

一俵まけてくれ、と菊太が願うのは祖母に向つてで私にはないけれ共、やっぱり祖母が思うと同じ様に、そんなに御意ぎよいなり放題にして居てはいけない、と思う。

何故そんなに、いつもいつもきっぱり出来ないんだろう、と思う。

私までが菊太に対してあんまり良い気持は持たない。私と同じ様に、女中だつてやっぱり何となし、変な男だ位には思つて居るにきまつて居る。

祖母が、菊太の話を聞くのがいやで連れられて、私達まで何だか知らんが菊太は意くじのない男だと思う。斯んな様にして、家内の人数が多ければ多いほど、何だかいけすかない小作だ、と思う氣持が大きくなって、男の氣の早いや息子でも居るとつい云わずとも良い事^いまで云い、「ひやかし」の一つも云う様になつてますます両方の間が不味^まくなるのであろう。

祖母は、「私はもうこの年になつて、小作男を泣かせても氣持の悪いばかりだから、盆、暮に金をやるのを一度にやったと思つて居るのさ」と云つて居るから両方で荒い声なんか出す事は決してなかつた。けれ共、どうしても願ひ通りにしてやればつけ上る氣味がある。

どうしたら小作がうまく上り、地主との氣持が円く行くかと云う事は、よく考えるけれ共分らない。

一番、小作をさせないのが良いのだろうけれ共、資産のない、他人の田を働いて生活して居る者は、それを取りあげられたら、この上なくひどい目に会う事になるからこまるし、又地主にした処で小作をさせなければ、家に下男を置いて作らせなければならぬ。それも、借すほどの田を一人では仕限しきれないから小作をさせるより却って手間と費用がかかるわけになる。

小作男と地主とはどうしてもはなれられないものの様である。何にしろ、一方は取る方で一方は取られる方である。恐らく、年に二度収獲のある土地でも小作男はなろう事なら、一二俵はまけ

て慾しくて居るだろう。

ほんとに何かうまい事が工夫されないと困ると思う。

(四)

随分と骨に通る様に寒い風が吹く。

家中で一番遅く起きた私は寢間着の上に、黒っぽい赤い裏の

「どてら」みたいなものを着て、不精に手を袖の中にしっかりと包んで、台所の炉のわきに女中が湯をわかして呉れるのを待つて居た。木の枝に火がついて立つ煙が目にしみてしみてたまらないので、

「こんな煙つぽくつては眼に悪いねえ。

と女中を見ると、崩れた薪をなおすために煙のまつただ中に首を突込んで何かして居る。こもった様な声で、

「赤坊ややの時から、煙の中で乳すうて居ますだもの。眼が馬鹿になつて居ますのだ。寒い朝ですない。風邪かぜ引きなさいますよ。

若い女中は、私の横顔を何か、さがし物でもする様に隅から隅まで見て居る。

「大丈夫だよ。今年は、冬が早く来る様だねえ。

と云つて居ると土間の処で、

「お寒うござりやす。」

と中年の女の声がする。女中が座つたまま、

「誰^{だれ}だい？

と云うと、

「己だが。

と云う。

「ああ、甚助さん家^げのおつかあか、お上^{あが}んなね。

「畑^{いぐ}さ行^{いぐ}のよ、東京のお嬢様いらっしやるけえ、ちよつくら呼んで来ておくんなね。

女中はチラツと私の顔を見て、

「お起きんなったばかりだによ、着物でも着換えてからいらっしやるだべ。

と云って茶を入れ始めた。

「何にしに來たんだろう。」

と思ひながら大いそぎで着換えて土間の処へ行くと、鍬をわきにころがして、もじやもじやの頭をして胸をダブダブにはだけた四十近い様な女が立つて居る。私の顔を見ると急に腰をまげて、

「お早うござりやす。昨日は、はあ家の餓鬼奴等が飛んでもないこといたしやつたそうでなし、御わびに來ましただ。」

と云う。漸くわけが分つた。

「わざわざ來なくつたつていいのに、どこの子供だつて悪戯はするもの怒つてなんか居るものかね、お前子供を叱つたろう、ほんとうにかまいやしない、大丈夫だよ。」

と云つてやると、女は氣安そうに笑いをうかべながら、

「お前様、今朝ね、お繁婆さんが来やしてない町さ行くが買物^{けえ}はねえかつてききながら昨日の事云いやしたのえ。一寸も知りましねえでない。御無礼致しやした。己^おら家の餓鬼奴等も亦何^げつちゆうだつぺ、折角、ねんごろにきいてくれるにさあ石なげるたあ。此間^{こねえ}だも——

と村校友達となぐり合を始めて相手に鼻血を出させたが、元はと云えばブランコの順番からで夜まで家へ帰されなかつたと話して聞かせた。

「御免なして下さりませ、ほんに物の分らん児だちゆうたら。」

「かまいやしないよ、子供の事だもの。」

女中もいつの間にか後に立って、

「ほんに彼の児は氣が強え^{つえ}児だかんない。

と云つて居る。じきに女は歸つて仕舞つた。女中は湯を「金^{かな}だら
い」にあげながら、

「頂戴物が減るのを氣づかつて来やしたのし。

と笑つて居た。

女中は祖母にその事を見た様に話して居る。

祖母に、たのまれた用事があるので、じき近処の牛乳屋へ行く。
此村に只一軒の店で昔から住んで居るので実力のある家だ。

四五年前に病氣が流行^{はや}つた時に数多の牛を失つたので、今は元
に戻すにせわしくして居る。兄弟で一家に居て同じ仕事を共同に
して居る。兄はどっちかと云えば小柄な、四角張った顔の中に小

さい眼と低い鼻と両端の下った様な口をして居る。髪を少し長目に刈つてクキンクキンとした眉の下からその小さい眼がすばしっこく働き、上眼で人を見る癖がある人だ。見かけは小細工の上手そうな男に見えるけれど、内心はそうではないらしい。村会議員の選挙、その他重だつた事にはなくてはならない人になって居る。

召使より早く起き日の出ないうちに外囲りを掃いてから、乳搾りやその他のものを起すと云う事は知らぬ者がなく、働き手で通つて居る。体も骨太に思い切つて大きく眼の大きい眉の太い弟の方は兄より見かけが良い。兄よりは熱のある顔つきをして居るけれど共深い事は知らない。

荷馬車の轍わだちの深い溝のついて居る田舎道を下り気味に真直に行

つて茨垣の中に小さく開いて居る裏門から入って行く。

左側の小屋の乾草を小さい男の子が倍も体より大きい熊手で掻き出して居る。

牛はまだ出て居ない。午前中は出さないものと見える。狭い土面をきちきちに建ててある牛舎には一杯牛が居る。私の幼さい時ちいから深い馴染のある、あの何だか暖ったかい刺激性の香りが外まであふれて居る。

退屈な乳牛共が板敷をコトコト踏みならす音や、ブブブと鼻を鳴らすの、乾草を刃物で切る様な響をたてて喰べて居るのなどが入りまじって、静かな様な、やかましい様な音をたてて居る。

わきに少しはなれて子牛と母牛を入れてある処がある。乳臭い

声で「ミミミミ」と甘える声や、可哀くてたまらない様にそれに答える母牛の声が私までが良い気持になる様にひびいて隙間から、草を口うつしに喰べさせて居るのが見える。

牛舎の中へ入って行く、馴れない故で牛の鼻柱の前を通るのはあんまり良い気持はしないけれど、静かに草をかんで居る様子は、どうしても馬よりはなつきやすい気持を起させる。ズーツと中に入ると消毒した後の道具を拭いたり、油をさしたりして居る男達が五六人居る。田舎の牛乳屋にしては道具でも設備でもがよく整って居ると思つて見る。

主屋に行くと誰も見えない。真黒いミノルカとレグホンが六七羽のんきにブラついて居る。中を一寸のぞいたけれ共人影が見え

ないので誰かにきいて見ようと思つて又牛舎の方へ行きかけると、裏の方から、主婦が出て来た。

「まあいらつしやいまし。よつぽどお寒うございますねえ、お上りなさいまし。

と気味よく云う。

自分で結う丸鬘をきれいに光らせて縞の筒袖の上から黒無地の「モンペ」をはいて居る。草鞋を履いてでも居そうなのに、白足袋に草履が^{ぞうり}あんまり上品すぎる。

足の方を見ると、神社の月掛けを集めて廻る男の様な気がする。年の割にしては小綺麗に見える人だ。二夫婦一緒に居るのだから気がねが多いと云つて居る。いそがしそうだから立つたまま用向

を云つて今留守な主人が歸つたら伝えて呉れと云つて置く。

お上んなさいお上んなさいと進められてもいそがしうだからと云つてかえりかけてる処へ大きな包をしょつてお繁婆が来た。買物をたのんだと見える。

しゃぼんだの足袋だの砂糖だのをならべる。

「こんなものまで町でなければありませんのですからねえ。と云つて居る。

足袋が目立って不恰好だ。

砂糖が二銭上つたと云いながら黄色い大黒のついた財布を出して少し震える手で小銭をかぞえて縁側にならべる。しゃぼんを一銭まけさせたと手柄顔に話す。

帰る時にミノルカが生んだのだと云う七面鳥の卵ほど大きい卵を二つくれた。東京ではとうてい見たくとも見られるものではない。大いそぎで勘定をすませたお繁婆は私のあとから追掛けて来て、

「御邪魔になりやすつぺ。

と云う。

疲れた様な足つきの婆さんに中^{まんなか}央を歩かせて私はわきの草中を行く。

甚助の家へ今朝よつたから昨日のことを話した。御詫びに行くと云つて居たがほんに行つたか、なんかと云う。

子供のことを一々そんなにとがめだて仕ずとも良い。私は何と

も思つて居ないんだからと云うと、

「何そんな事がありますべ、人がねんごろに問うてやるに石投げるなんちや此上ねえ悪い事なんだつし。

腹を立てた様に太い声を出して云うのである。後生願いの良い婆さんだから私に、本願寺にお参りさせて呉れろと云う。案内して呉れと云うのか私の金で連れて行つてくれと云うのか分らない。一つ二つ短かい距離みちのりを行く間に「あみださま」に關した話をして聞かせた。

あんまり御噺話めいて居るので笑いたい様な顔をする、

「学問の御ありなさるお前様方にやあ可笑しかんべえけど私わした達は有難がつて居りますのさ。

といやな顔をする。見かけによらない話を沢山知って居る婆さんだ。

祖母は年柄ではさぞ信心っぽい人の様だけれ共案外で別に之と云う宗教も持つて居ないので、私達のところへ来ると熱心に「あみださま」の講釈をする。

口振りでは、彼の世に、地獄と極樂の有る事を信じて居るらしい。一体、村の風で非常に信心深い村もあるが此村はさほどもなく、他人ひとの家へ来て仏様の話をするのは此の婆さん位なものである。後生せい願いの故か行儀は良い。働き者でもあるから祖母は好いて居る。

婆さんは家へ来ると井戸端ですつかり足を洗い、白髪を梳しつ

けてから敷居際にぴったりと座って、

「ハイ、御隠居様、御寒うござりやす。御邪魔様でござりやすと云う。

歩いて居ると体はまっ直^{すぐ}になつて居るが、座るとお腹^{なか}を引つこめて妙に膝が長い形恰になつて仕舞う。

婆さんはこの前の日まで中学の教師の家へ手伝に行つて居たとか云つて、

「めんごい赤坊さまでござりますぞい。眼が大きゆうて、色が抜けるほど白くてない。先生様、そつくりでいなさりやす。奥様も順でいなさりやすから昨夜^{よんべ}お暇^{よんべ}いただいて来やしたのえ、
父^{とこ}様^{さま}も母^{かか}様^{さま}も、眼の中さあ入りたいほど様子で居なさる。

赤坊^やのうちは乞食の子さえめんげえもんだつちゆが私^{わし}でも赤坊^やの時があつたと思やあ不思議な氣になりやすない御隠居様。

他愛もない声を出して笑う。

「そうそう、私^{わし}がお暇^{ひま}ただく三日ほど前にお国の母^{かかさま}様が、

東京さあ嫁^{かた}づいて居なさる上の娘さんげから送つてよこしたち

ゆうて紫蘇^{ごま}を細あく切つて干^{ほし}た様なのをよこしなすつたんです

がない、瓶の蓋が必^{かならず}してあきませんでない又、東京さ、たより

して、どうして使うべえてきいてやりなすたのえ。御隠居様あ、

御存じなんべえから、分つたらちよつくら教えてあげて参じ様

と思いましてない。

「蓋に紙が張つてあつたんだろう。」

「ありやした、色取った紙が。」

「その紙をあけると、蚤取り粉の曲物まげものの様に穴の明いた蓋になつて居るからそこから御飯にかける様になつて居るんだよ。」

しめりがこない様にそうするんだらう。

「それでやすか、そんで始めて合点が行つた。田舎者はこれですかない。」

一寸背をちぢめる様にして愛素笑いの様な事をする。祖母は婆さんに与やうと思つてカステラを丁寧に切つて居る。何にも慰めない祖母は東京から送つてよこすお菓子を来る者毎に少しずつ分けてやつて珍らしい御菓子だと云つて喜ぶのを見るのを楽しみにして居る。田舎は時間と云う考が少ないのでいつと云う限りなし

に来て来ないでも同じ様な者が沢山来るのでその度毎に出すところかなり沢山あったものでもじきになくなって仕舞う。カステラがあと一切分ほか残りがなくなったりすると急に減り目を目立って心に感じて、

「もうこれっぽっちになつたのかねえ。

なんかと云う。

祖母の口へ入るより来る者の喰べる方がどれだけ多いか分らない。

東京の習慣だと客に行つて出された菓子をおるだけ喰べる事はないので、始めのうち炉端へ座り込んで自分で茶をつぎ、よっぽど沢山でもなければ残さず出したものを喰べる無邪氣っぽい

お客連を見ると変な氣持がした。

お繁婆さんは木皿へ盛つて出されたカステラをしげしげと見ていろいろの讃辞を呈してから大切そうに端から崩^{はじ}して行く。實際この村や町では藤村のカステラの様な味のものはさかさに立つても喰べられないのである。

お繁婆さんが永い事かつてカステラを喰べ幾重にも礼をのべて歸つた後から、元、小学校の教師か何かして居た人の後家が前掛をかけて前の方に半身を折りかぶせた様にして來た。何でもない、只町に新らしい芝居のかかった事とこの暮に除隊になる、自分の家の前の息子の噂をしに來たのである。

祖母はこの婆さんを好いては居ない。げびた話ばかりして何か

もらうか食べるかしなければ帰る事のない人だからである。

貧しいと云つても比較的東京の貧乏人よりは何かが大まかで、来た者に何かは身になるもの、例えば薯たとの煮たの、豆のゆでたの、餅等と云うものを茶菓子に出すので、家から家へと泳いで廻つて居るこの人等は三度に二度は他人の家で足して居られるので、孤独の貧しい頼りない生計も持つて居る事が出来るのである。田舎の純百姓で針の運べる女は上等で大方は少しまとまったものは縫えず、手は持つて居ても畑に出て時がないので、そこに氣の附いた町の呉服屋では襦袢から帯から胴着まで仕立てあげたのを吊して売つて居る。この婆さんは呉服屋の仕立物をうけおい、その呉服屋が此村に持つて居る貸家に、長い事、不精に貧しく暮して居

るのである。

不幸な人と云わるべき老婆である。全くの孤独である。子も同きようだいみより胞みよりも身寄もないので家も近し、似よった年頃だと云うのでよく祖母の家へ話しに来るのである。

年を取った象と同じ様に体中に茶色の厚いたるんだ皮がはびこつて居て、眼も亦その様に細く気がよさそうにだれて居るのである。大抵は白い様な髪を切りさげて体からいつも酸すっぱい様な臭いを出して居るが、それは必して胸を悪くさせるものではなく、そのお婆さん特有の臭いとして小さい子供達や、飼いものがなつかしがるものである。笑う時にはいつもいつも頭を左の肩の上のせて、手の甲で口を押える様にして、ハッハッハッと絶きれぎれ

に息を引き込む様に笑った。その様子が体につり合わないの
で、笑う様子を見て居る者がつい笑わされるのである。

「まあ、貴方、郡山こおりやま（町の名）さ芝居が掛りましたぞえ、

東京の名優、尾上菊五郎ちゅうふれ込みでない。外題は、塩原
多助、尾上岩藤に、小栗判官、照手の姫、どんなによからう。
見たいない。

祖母の顔を見るやいなや、婆さんは、飛び立った様にその小
さい眼をかがやかしながら云う。

「行ってお見ねえか？

「私は、あすこまで歩くのが事でなし、郵便局のお政さん
とでも行けばいいに。」

「お政さんとかい？」

「ほんとに菊五郎が来るんでしょか。」

私がきく。

「去年も来ましたが、から下手の下手でなし、この間、初日にお徳さんが行ったちゆが去年のと顔が違う様だつて云つてましたぞえ。」

「まあまあ、菊五郎の名だけ来るんですねえ。」

婆さんは懸命に去年見た、お染久松の芝居を思い出して話してきかせた。お染の「かつら」が合わないで地頭が見えて居たとか、メリンスの着物を着ていたとか、脚絆をはかないので見つともなかつたとか云つて居る。祖母も私も笑つてきいて居る。こんな時

には大抵祖母の歌舞伎座だの、帝劇だのの話が出る。

「小屋だけ見ても結構なもので。

と天井に絵の張つてある事、電気がまぼしくついて居る事、ほんとうに、縮緬や緞子どんすの衣裳をつけて居る事などを、単純な言葉で話すのだけ共、しまいには行かれも仕ないのに、只行きたがらせばかりするのはつみだと思つていい加減にお茶をにごして仕舞う。町へ芝居を見に行く前に、村の者はこの婆さんのところへ行つて概説あらすじだけをきいて来るのである共、時には伽羅千代萩と尾上岩藤がいっしょになり、お岩様とお柳とが混線したりする。けれ共この村でのまあ芝居通である。

婆さんはいろいろ祖母と話をした末とうとう行くときめたらし

く五十銭^{きばる}氣張のだと云つて居た。

「そいから御隠居さん、私の家の前の高橋の息子を知つて居な
するべ。あれが暮に除隊になつて来るつてなし、母^{かかあ}どんは今か
ら騒ぎ廻つて居るのえ。花嫁様、さがすべえし、もうけ口さが
すべえしない。百姓には、したくないちゆうてなし。中学出し
たからですべ。

婆さんは思い出し笑いをして肩をすぼめる。其の息子がまだ中
学に居た頃、この婆さんの家に居て通つて居たが、お針に来る娘
が夢中になつて可笑しいほどだったが、いつの間にか噂が立つて
娘はお針に来なくなつた事を「さもさも若い者が」と云つた口調
で変に笑いながら話す。

村の子がその息子に娘からの手紙を持って来たが留守だったの
で、婆さんが受け取って帰って来た時渡したら、火の出る様な顔
をしてすぐ外に出て行ったなどとも云った。

「十七か八で色は白し、眼は大きし、ほんに小栗判官の様でな
し。あの娘も、ここの娘にしては、小綺麗な娘でしたぞえ、
私の家へ来ん様になってから判官様は夜おそくまで帰らん事が
よくありましたつけし。逢うて来るのだつぺ。まだ嫁^むかさらん
ちゆうことだてば、判官様に、嫁様が来たたら、化けて来べえ
て、ハッハッハッ。

お婆さんは、いつもの通り顔をまげて笑う。

「三年、日に照らされづめで来たのだでは、あの白いのも狐色

位になつたろう。

村の聞新しい事柄がいつもこの婆さんの耳へどうしたものか先ず第一に入るものと見える。

身寄らない割りに我儘で、すき勝手に彼の人はいくらだとか、彼の女は、変だのと云う。そうしてそう云う人の噂はきつと悪くつたわるのである。

その噂の元はと云えば、誰も知る者はなく、婆さんの耳元だけ、聞えたと感じた事もなかなか少くないのである。中傷するほどの腕はないけれ共、自分の交際つきあいばかりを次第次第にせばめて居るのである。

「先生とこの奥様もこの上なしのぐうたらすべ。朝から晩ま

で流しの上には、よこれものがたまつて新らしい茶碗の縁が三日と無疵で居たためしがないとなあ、三十九にもなつて何てこむきずつたし、あまり昼、夫婦づれで、仮寝うたたねばかりしているからだ
なつし、貴方。

それが、裏庭にある小学校長の家で妻君が庭を掃いて居る時に
きこえてからと云うもの、もらいものが腐りそうになつても、食
べきれないほど野菜があつてもやる事はぴったりやめ用事があつ
てもこの婆さんの居る時は必して声さえかけないほどになつた。

實際この細君は、田舎の小学の先生の細君の一番好い典型であ
る。その、のろい事、わकारの悪い事、眠りたがる事は私でも始
めて位である。台所でごとごととしてでも居なければ午後からほん

とうに夫婦づれで明けっぱなしの座敷の中央にころがつて居る。

絶えず、人の好い微笑を口にうかべて、何と云つても必ず、

「そうだけんども。」

とつける人である。瀬戸物かきの名人だと云う評判もある。それは事実らしい。日に一度、焼物と焼物のぶつかり合う、あの特別な響のきこえない時はない。

「気をつけろつちや。」

校長さんは怒鳴るのである。

毎週土曜に町まで通つて、活花を習つて居るのが流石はとうなずかせる。そんな時、主人は学校からかえつて来て、南金錠を自分であけて雨戸を引きあけ細君の置いて行つた膳に向つて長い事

かかつて昼飯をするのである。

毛むくじやつて云つても、ああも毛むくじやらかなものかしらんと思うほどの毛むくじやらで、髯は八の字に非常な勢ではね上り、その他の顔中、こまかい和毛にこげの黒いのが一杯に掩うて太陽に面して立った時は、嘘でも御まけでもなく、顔から陽炎かげろうが、ゆらめきのぼつて居る様に見える。

人は好い、その細君を大切にするだけ人が好いのである。私に少しまとまった話をするのは此人だけ共、幾年か昔の記憶のまの頭は折々、妙な事を云わせる。人によつて言葉を選まないから、或る人は威厳のある先生様だと思い、或るものは、分らない事を云う御仁ごじんだと思う。

先生の生活はまことに平穩無事である。そして幸福である。一番大きな息子は、京都で医者になつてもう細君もある。けれども、なぐさみに小さい男の児を育てたいと云つて居るのである。

斯うして心配なく、こんな空氣の好い処に住んで居て、早死にをしたのを聞いたら私はきつとそれを間違いだらうと云うだろう。秋の末頃までこの村の人達は生きて居るけれど、一雪下りるともう死人の村と同様で、人々は皆家へ閉じこもり、「わら靴」を編んだり「負いかご」を作つたり草履を作つたり、女は出来るものは縫物だのはたを織つたりする。折々田や畑に見える人影は、たまあに自分の持地を見まわる人の影で、往還でさわいで居るのは犬と子供と鶏だけと云うほどになる。

猫などは十一月に入ると大方は家に引込みがちである。この先生は十二月の末頃までは、雨が降って、吹雪がしても通わなければならぬ。

先生にとって最も苦痛な冬は草の色にも木の梢にもこの頃は明かに迫つて来た。厚い外套と深靴、衿巻、耳掩を、細君が縁側にならばなしで家を人っ子一人居ずにして、いやと云うほど怒られて居たのもついこないだの事である。

(五)

私が斯うやって、貧しい平凡な村に来て、一冬越そうなどは、

今斯うなつて見る時までは、思いさえもして居ない事だった。東京に居て、越す冬は、今此処で会う晩秋位ほか、寒さも、淋しさも、感じはしない。いくら寒いと云つても道があるけば家屋は立ちならんで、往来もはげしいし、家の中の燈だの、火だのが外まで明らかに美しい輝を見せて居る。

冬の淋しさ、それは斯んな北の人の乏しい山ばかりの貧しい村などに於て、ことに深く深く感じる事である。恐ろしいばかりの淋しさを持つて冬は日々に迫つて来るのである。

収獲がすんだ頃になつて気まぐれな私は此処へ来た。わざわざ寒さの中へ飛び込んだ様なものだ。来年の冬は、私は又東京の家で、ふくれた様に火にあつたまつて暮す事だろう。寒ければ逃げ

て行く家を私は持つて居る。逃げ様にも逃げられぬ、この村人の哀れさを思う。霜はもう十月の末頃から見える。けれ共流石に日のある中は袷で素足で居られる。もう十一月十二月となるとすっかり冬景色になる。こないだうちから山の頂には雪が見えて居る。四方を山にとりかこまれ、中央に低くある村には、急に冬が来て、去る時とは云えば、いつまでもいつまでも去りかねた様な様子をして居るのがならわしである。

四辺の木立はすっかり枯れてしまった。三番池の周囲の草原の草は皆、かれはてて、茶色になり、朝々の霜で土がうき、ポコポコになって、見通せる限り皆、なだらかなでこぼこになって居る。桑は皆葉をはらい落して、灰色のやせた細い枝をニヨキニヨキと、

あじきない空のどんよりした中に浮かせて、その細いに似合わない、大きな節や「こぶ」が、いかにも気味の悪い形になって居て、見様では、よく西洋のお伽話の挿絵の木のお化けそっくりに見え、風が北からザーツと一吹き吹くと、木のお化けは、幾百も幾千も大きな群になって、骨だらけの手をのばして私につかみかかろうとする様だ。川の水も減つて、赤っぽい粘土のごみだらけのきかない処が見え出し、こちこちになつてひびが入つて居る。小魚の姿などはとうにから見えないのである。

町につづいて居る小高くなつて居る往還は、霜が降つても土は柔くなろうとはせず、只かしかしにかたまつて、荷馬はよく蹄を破るし、人は下駄を早くいためる。電信柱は、ブーン、ブーンと、

はげしいうなりを立て始めた。

何と云う寒い淋しい事だろう。灰色の空は、はてしもなく重くおいかぶさつて、晴れ渡る時は極く少ないうちに夜になって仕舞う。人の声も犬の声もしない。狐の提灯が田の中を通ると云うのも此頃である。雪でも降れば、雪見舞の人々が通日も仕様けれ共、雪降り前の、何となくじめじめした、雨勝ちの今頃は皆が皆こもつて居るので、人通りと云うものはまるでないのである。

町からの魚屋も大方は来ない。辛い鮭と干物とが有る時は良い方である。私共は毎日野菜で暮して居る。牛乳の有るのを幸、それで煮たりして少しは味の変つたものもたべて居るものの、魚のなまか、牛の焼いたのがたまらなく欲しい事がある。そう云う時

に折よく東京から送つて呉れる、魚の味噌づけ、「^{ひと}二しお」の嬉しきは一月に一度か二度ほか魚のたべられない処へ行つたものでなければ分らない事であろう。外へ出てする事はなし、農民は、冬が一年中の食^{くい}時^{どき}である。正月にならないでも餅をつく。東京の様に四角い薄平^{うすべ}つたいものにするのではなく、臼から出したまんま蒸^ふすのでまとまりのつかないデロツとした形恰になつて居る。それを手で千切^{ちぎ}つて、餡の中や汁の中へ入れる。あまりは鍋などの中へ千切つて入れて置くのである。見た所は、出来上りでも東京のよりは倍も倍も不味^{まず}まずしい形をして居るけれ共味は却つて良い位である。

こうして餅をつき一日がわりに家々をたべて歩いてなど居るの

である。こんなに寒くて居ながら食物は非常に粗末で餅等は上等の食料である。この村で一番食物に困るのは云わずと知れた冬である。私は、寒さよりも、食物よりも、その淋しさに堪えられない程である。このまんまズーツと地の中に沈んで行つて仕舞いそうな氣持のする地面の様子や枯坊主になつてヒ―ヒ―云つて居る木々の様子は、こんな処になれない私をよほどつよく刺激する。私は毎日こもつて火のそばをはなれず着ぶくれて身動きもならない様にして居るのである。

この寒さの最中、満期になつて歸つて来た高橋の家の息子は歸るとすぐ家へ来た。面長の、眼の大きい、すんなりした顔立の男だけ共、少し氣の遠い処が有りそうな口元をして居る。色なん

かちつとも白い事はない。額の生際の方が少し顔の下の方よりは白っぽい。まだいかにも兵隊帰りの様子をして居て歩くのでも、口の利きかたでも「……………終り」と云いたげな風である。

「そうであります。」

と云うのがいやに耳ざわりに聞えた。辛かった事、面白かった事を細々かぞえたてて話したのが祖母には耳珍らしくてよかつたらしい。

冬の最中に、銃の手入をするのが一番つらかったと云った、赤^あ切れ^{かぎ}から血がながれて一生懸命に掃除をする銃身を片はじから汚^なして行く時の哀^なさ^{さけ}と云うものはない。銃を持って居る手がしびれ、靴の中の足がこごえて、地面のでこぼこにぶつかってころん

だり銃を落したりする。

祖母は涙ぐんできいて居た。来る人も少ないので祖母は長い事引きとめ、いろいろ食べさせたり、飲ませたりして、反物をお祝だと云ってやった。涙を襦袢の袖で拭きながら、

「お前もまあこれで一人前の男になったと云うものだ。これからは嫁さんがしにせわしい事だねえ。

と云うと男は、

「何そんな……………」

と云って座りなおした。祖母は自分の身内のものの様な、頼たのしい様な気がして居るのだろうなどと思つて私は見て居る。学校仲間、在郷軍人、親類などから祝によばれたり呼んだりするので母親は

せわしがつてるとうれしそうに云つて行つた。

高橋の息子が歸つた頃から又寒さがました様で、段々空氣は荒く、風の吹き様もなみではなくなつて來た。祖母は、吹雪の時の用心に屋根瓦を見させたり、そこいらの納屋の壁や、野菜を入れて置く穴倉に手を入れさせた。毎朝來るトタン屋は、風呂場の樋とよだの屋根だのの手入をして居る。いかにも手が鈍い。東京の職人も煙草を吸う時間の永いには驚く様だけれ共、まして此処いらのはひどい。弁当は持つて來ない。縁側に腰をかけて出して呉れる膳に向つて暖つたかい飯を食べる。何故職人に平常の時膳ふだんを出してやるのだと聞くと此処らでは少しゆとりのある家では、皆昼を出すのだと云う事だ。あんまり職人につくして居る様な氣がする。

トタン屋も来ない様になり、家の中は一層ひっそり閑^{かん}として、私が大股に縁側を歩く音が、気の引ける様に、お寺の様に高い天井に響く。持って来た本もよみつくした私は、一日の中、半分私^が顔を知らないうちに没した先代が、細筆でこまごまと書き写した、戦記、旅行記、物語りの本に読みふけて居る。若しそうでない時は、炬燵で祖母ととりとめもない世間話しや、祖母の若い時分の話をきくのである。風は日一日とすすんで雪の降りつもつた山からは、その白さが下へ下へと流れて来る。

始めての雪の降った前の晩の寒かった事と云ったら、私でさえ、床の中でガタガタするほどだった。

「寒くはないか。」

ときく祖母の声さえ震えて居たので私は女中に湯タンポを入れさせた。

「お前が居なければ、私が云うまで気をつけて呉れるものはない。

祖母が涙声で云った時、私は、急に母の居る処へ飛んで歸りたほどの、どうしていいか分らない、悲しい様な淋しい様な氣持になった。私は「何故こんな処へ来たのか」と悔む様な氣持になりながら涙をこぼして眠ってしまった。目を覚めた時は二時頃だったろう。

あんまり風がはげしい。雨や風のひどい時は、恐ろしい様な氣持がして眠られない私はきつと、この風の音に眼をさまされたの

だろう。障子のガラスについた小障子をあけて雨戸のガラスをすかして見ると、灰を吹きつける様に白い粉が吹きつけると一緒に、ガタンガタンと戸がゆすれる。こんなにもひどい吹雪を見た事はなかった。始めの間は珍らしい気がして見て居たけれ共、段々時が立つにしたがつて私は恐ろしくなつて来た。私は此上なくいやなのだけれ共、祖母がきかないので、部屋の中は真暗である。二つの床をぴったりとよせて枕屏風が暗い中でも何か違つた暗さに私達を取りかこんで居る。

一尺一寸位の四角な面に絶えず白い粉が乱れかかつて、戸は今にもたおれそうにガタガタきしんで、はめ込んだガラスの一種異つたビリビリ云う音が寝しずまつた家中に響きわたる。下らない

ものでも見つめて居ると恐ろしくなるか又は嬉しくなるものだと私はいつでも感じて居る。明るい中でみつめるものの総ては土でも木でも色々な日用品でも皆、自然ひとりでに微笑が湧きのぼる様な柔い気持になる。けれ共夜の暗い中で物を見つめて居る時の恐ろしい事と云ったら、もう躰がすくんでしまう様な、顔を掩わずには居られない様になる。私はじいつと眼を据えて白い粉雪の飛びかかる四角い処を見て居るうちに段々その四角がひろがって行き、飛び散る白いものも多くなり、それにつれて戸の鳴る音なさえ、ガンガン、ガンガンと次第に調子をたかめて行つて、はてしもなく高く騒々しくなつて行く音は、家中のありとあらゆる戸——袋戸棚の戸でも、戸棚でも、ましては枕元の屏風からさえ響いて

来る様に想えた。

祖母の寢息さえ私の耳には届かない様になった。こんな事は勿論、私の妄想にすぎないと知りつつも、此上ない恐れに心を奪われて、いきなり枕へ頭を下すやいなや、夜着を深くかぶって、世界中たった一人の身になりでもした様な、たよりない気持になって、静かな眠りに入ろうとした。東京に居たら、こんな時、私は母の床の中へかくまってもらう。どんなに恐ろしくても、安心な気持になって母の手だの袂だのを握って気のしずまるまで置かしってもらう。私は火を吹く時の様に、頬をかすかに、ふくらませたり、すばませたりして寝入って居る祖母を起す気にもならなかった。

安眠が出来ないまんま朝早く起きると変な工合に雪が積つて居るのを見つけた。北からのひどい吹雪だったのですべて北に面した方ばかりに吹きよせられた雪が積つて居る。前の庭の彼方^{むこう}を区切つて居る低い堤には外側の方がひどく白くなり立木の皆がそうである。雨戸はことにそれがはげしく北の雨戸は随分あつくかたまつて、戸袋に入れるのに女中は雪を箒ではらい落したほだけれ共、南側のはほんの少しほかついて居ない。

長く此処に居る祖母は、「こんな事に驚いて居るなら三尺も雪が積る時はどうする」と笑つた。實際私はまだ七寸より厚く積つた雪を見た事はない。

小学校の先生は、自分の家の縁側に出て、

「ひどく吹きやしたなあどうも昨晚は妙に凍^しると思ひやしたよ。
とこつちの縁側へ朝のあいさつをした。女中は手がかじかんで、
湯のみ茶碗を破つて仕舞うほどだった。朝になつてもまだ、少し
許り吹雪めいたものがして居るので女中等は少し遠くにはなれて
ある納屋へ薪を取りに行くのさえ出来るだけのばして居た。

台所の炉には枯木をうずたかくつんでボンボンもやして居る。
もう少しして来て呉れる雪見舞の百姓共をすぐ暖めてやれる仕度
である。あばれて氣むらな、降り様をした雪なので四辺の様子に、
美しくさなど云うものは少しもない。或る処は、まっ白い海の
様に見えるかと思えばそのわきには茶色の草や木や畑がむき出し
になつて悪く云えば「なまず」だらけの老婆の顔の様にみつとも

ない。祖母と女中は物ずきだと云つて随分止めたけれ共、私は、傘をさして足駄を履き、ブルブルしながら庭の一番深く積つて居そうな処々を選んで歩き廻つた。皮膚に粟が出来て、唇が紫になり、いつも私がいやがって居る通りに鼻が赤くなるのが自分にも感じられた。庭の堤どての上に並んで居る小松に積つた雪は何と云つても美しい。裏の竹藪で雪を落してはね返る若い竹のザザザツと云う音が快く聞えて来る。車井戸をすっかり雪で包んでお菓子の様に甘そうに、あすこれから水が出ようなどとは思われない形になつて居る。

一廻りして帰りかけた時、コールテンの足袋を履いて居る足の指の先が痛くなつて来た。

どうかするとつまずきそうになる。片手には大きな番傘を持ち、左の手は袖の口に入れて、袖口の処を一寸指先だけで内側にまげ、肱を張って調子を取り、一足歩いては雪を下駄の齒から落し、又一足行つては置土産をし、来たあとを振りかえるとズーツと向うの曲り角から今自分の立つて居る処まで、齒の幅に下の方に泥が^{どろ}黒くついて居る雪のかたまりが二つずつ、木の根と云う根の処に必ず思い思いの方を向いてころがって居る。

手や足がひどくつめたくなつたので、私は家へ上ろうと思つて堤にそうて入口の方へ行こうとした二三間の木も杭もない中央の処で齒の高さから二三寸も高くはさまつた雪の始末に、あぐねて仕舞つた。足を宙に振つて見ても、只、下駄が飛んで行きそうに

なるだけで雪は一向に落ちない。雪を落す事は断念してその至極歩きにくいコロコロする下駄で、そのまま歩く事を工夫した。つまさきをすつかり雪の中へ落して、爪皮一枚を透して雪の骨にしてみる様な冷たさを感じながら荷やつかいな下駄を引きずって歩き出した。

ころぶまいとする努力のために私は一心に地上を見て体中の神経を足の先に集めて居るとフイに耳元で、

「やや子（赤坊）の様な事してなさるて事よ。

と云う声に驚いて見ると、甚五郎爺が大きな雪かきを肩にかついで、長靴を履いた上にわらぐつを履いて「もんぺ」をだぶだぶにつけて立って居る。見ると、家の持地の入口の道から門まで一直

線の路をつけて、踏み先へ先へと、雪かきを押して来たものと見え、今自分が立つて居る処までほか地面は現われて居ない。父がまだ若い時から居た爺なので、私の事をまるで、孫でも見る様な気で居る。顔中、「たて」の大波をよせて齒ぐきを出して、私の様子を見て居る。

「東京さ、告げであげますだ。さ、来なされ、そろそろぶころぶ。」

爺は、その大きな、私の頭なんかは一つかみらしい変に太くて曲った指のある手で私の手をひっぱり、三つ子を歩かせる様に私を家へつれ込んだ。

この様子を見ると先ず笑ったのは女中で、怒りもならない顔を

して祖母は、

「まあ何て事だえ、甚五郎が来なかつたらどうする。

と云いながら、私に綺麗な足袋を出して呉れた。祖母は、

「鎌足らず公だから、三河屋の呉れた餅を三ヶ一ほどお汁の中へ入れておやり」と云う。甚五郎は炉で煙草を吸つて居る。

鯛の眼の通りな水色の眼玉は、たるんだ瞼をながれ出しそうになつて居て、「たて」や「横」の「しわ」が深い谷間を作つて走つて居る。大抵は頰^はげた頭の後の方に、黄茶色の細い毛が少しばかり並んで居る。

齒のない口をしつかり結んで「へ」の字形にして居るので何だかベそを搔^かてる様に見える。耳のわれそうな声で話すが、自分は

非常に耳が遠い。十近く年上の祖母から「耳が遠いよ」と云われるほどである。随分長い間、今小学校の校長の居る処に住んで居て、畑や米の世話をして居たが、氣の勝った年寄の召使と主人とは、しばしば衝突が起つて、しばらく東京の家の方へ来て居た事もあつたけれ共、今は、隣村とこの村の境のどっちともつかない様な処へ息子からの「あてがいぶち」で暮して居る。少なからず抜けては居るが、この爺をこの上なく大切がつて居る女房は、百姓共の小供の着物等を縫つてやつて僅かの口錢を取つて居る。

長い事、煙草をふかして居た甚五郎は「やつこらさ」と立ちあがつて、祖母の居る茶の間の入口に小山の様に大きく膝をついて拳固げんこにした両手の間に顔げて寒そうな頭を落す。

「とうとう降りやしたない。寒い事寒い事。」

と目を細くする。そして私の方を見て、笑いながら、さつきの私の様子を細々こまごまと祖母に説明してきかせるのである。お汁つけの中の餅をありつたけ食べつくしてから甚五郎は水口から井戸までの細道をつけ一通りぐるりを見廻つてから、手拭をもらつて歸つた。

それから後、引きつづき引きつづき有象無象が「悪いお天気でやんすない、お見舞に上りやしただ。」

と云つて来た。その中の或る者は、水を四肩（二つの手桶を天秤棒にかけたのを一肩と云う）も汲んで行つたり、これから四五日の薪をすっかりこしらえて行つたのもあつた。けれ共中には、

「悪いものが降りやしただない。」

と炉端に上つて下らない事をしゃべつて餅だけはあまる程食べて何もしずにそのまんまスタスタ歸つて仕舞うものがあつた。

「あの男様とっさまあ、餅ばかり振舞われに來たのだし、塵つぱ一本、拾うでなしに歸りやしたぞえ。

そんな餅食に來た男があると女中は云つて居た。斯うして暫のうちに餅は二つ三つほか千切つたのが残らなくなり、やる物を入れた箱の中から三四本の手拭が出て行つたのである。

夕方近くまで吹雪が晴れ渡らなかつたので、その日は一日、日の目を見ない、じめじめしたわびしい日を送つて仕舞つた。祖母は夜までも、炬燵の中で「はぎ物」をして居る。私は東京へ、今年の初雪を知らせてやる。手紙の中へ、

「私は今何故、こんな時に、こんな処へ来たかと、自分の物ずきな心がうらめしい。寒には堪えられても、口に云えないこの淋しさには、到底打ち勝てそうにもない気がします。」

まあ考えても御覧なさいよ。今頃から雪は降って小一日吹雪は止まない。その中で私は東京に居る時の様に更けるまで息をはずませて話合う様な人はたった一人もない山中に、いつもいつも待遠がつて居る夜が来るやいなや、寢床へもぐり込む。寒いのでそちらの様に長起きが出来ないんです。つくづく東京が恋しい。平常私は『自分は、手足は山の中に暮しても頭だけ――私の仕事なり考えなりは大都會の中央で活動して居なければ満足出来ないだろう』と云ってましたが、尚更、私は、そう云

う人間である事が明かになって来ました。帰りたい、ほんとうに帰りたい。けれ共、東京で桜が末になるまで、冬の寒さにつかまえられて、雪の積った中に祖母を見す見す残して行く事を考えれば、そうも出来ない。皆気が利かないから私でも居なければ、暖まらない時に湯タンポを入れたり、夜着の肩を打^{たた}いてあげるのは一人も居ないんですものねえ。

と書いて友達に、家へは、キニイネの丸薬とその処方を送って呉れる様に云ってやる。私はすっかり冬籠りの仕度をするためにその他、毛足袋だの何だのも云ってやった。女中は炬燵の中で、松の枝に下った「つらら」に砂糖をつけてカリリ、カリリとたべて居た。

(六)

雪解^{ゆきげ}で一しお寒さがはげしい。

キラキラしい太陽が面^{かお}を出したので雪からは少しずつ水蒸気が立って行くのが見える。あたりが何となし、うるおって、ハアツと息を遠くから吹きかけた鏡の面の様な空合になつて居る。太陽は美しい色に輝いて居るけれ共、寒さはひどいので、小川の面から息が立って居る。土地は汚なくなつて行くばかりである。昨日、一日休んだ馬が、パカツ、パカツと勢よく、町へと里道を小さい穴だらけにし、草鞋の両方へ、泥をとました足跡で、道はゴ

タゴタになつて仕舞い、鶏が、馬の蹄の跡の穴の泥水みたいな中へ足を踏み込んで、腹まで羽根をどろでかたまらせて居る。

小川の水かさが少ししました。三番池には、非常に沢山の水鳥が群れて居る。五、六羽白い色のも見える。何だか分らない。大抵は鴨位の者であろうが、白いのだけは流石にもっと好いものらしく見える。

昼近くなつてから甚五郎爺が一羽まだバタバタして居る鴨をさげて来た。田の中に昨夜から「繩落し」を掛けてとつたのだと云つた。大方彼の群の一羽で有つただろうと想つて見る。非常に羽色が美しい。頸の、群青色等は又とないほど輝いて、そのまんな私の頸に巻きつきたいほどだ。足なんかもさえた卵色をして居

る。

食べるのは惜しいからこのまんま飼おうと云ったが聞き入れられなかった。甚五郎爺も、あまり食物がないからとってきたのにたべないなら又放して仕舞うとさっさと足を握って裏へつれて行って仕舞った。

鴨の肉は好いて居ない。何だか鴨くさい臭がする様だ。鴨雑煮をすると云って居る。私は裏へ行かない。こしらえるのを見ては一切だつて喉を通るものではない。甚五郎爺は薬だと云つて鳥の「きも」を出すとすぐ生なまのまんまのむと聞いて、私は喉へ丸たまが上つて来るようだった。鳥にも「きも」なんてあるものかしらん、私は獣ほかない様な気がして居た。昨日の雪見舞の者達に皆食べ

られて餅がないので女中は源平団子にもちごめと引きかえに餅をとりに行った。東京の鴨の様に臭がない。

お八つ頃、例の芝居ずきの御婆さんと呼んでやる。結構だ結構だと云いながら、年に合わしては随分沢山たべて、こないだ見て来た多助の芝居の話をした。多助が「青」と別れる処をどれほど感動したものか、泣きながら、

「貴方——芝居は青の別れに限りやすぞい、別れたくないって、多助の頬に、自分の頬をすりつけてない。

と云った。十二時頃、小一里も歩いたので風邪を引いたと云つて、赤坊の様にケン、ケンと云う「セキ」をして居た。鴨の肉のただ煮たのを小さな皿に持って行つた。

「粥でも作るつもりだかし」と祖母は笑つて居た。

湯のたて廻しと云う事が行われて居る。今日は誰の家で湯をたてると、あすは、誰の家でたてると順をきめて、湯をたてる番の人の家へもらいに行くのである。家で湯をたてると彼の小学校長の家族を始め、あすこの婆さん、此処の女房と、湯をもらいに来る。自分の番になるのを待つて居るものや、もう上つたものは炉の廻りに集つて、茶をのみのみ世間話をして居る。血統も分らない——又どんな病氣を持つてこうして居るかもしれない人達を、自家の湯へ入れると云う事は随分と危険な事だ。外で ぎょうずい 行 水 を つかえなくなつてからだけでもたててる。小銭湯の様な特別の湯槽をだれかの家へあずけて、湯のないものは、その家の家族のと

は違った湯槽に入る様にしたらいいだろうのにと祖母にも云ったけれ共、湯のたて廻しなどが平常気の置けない交際機関になって居るので、今急にそれをやめれば皆が不自由するし、又、悪く思われるからと云って居た。祖母と私は一番先へ入る事にきめて居るのである。

そんな事をしない東京から来て見ると何だか不安心だ。銭湯を知らない私は、温泉でさえ気味が悪い様でいやがって居るのだもの、新らしくなりもせず、汚れた水を吸い込む木の槽の肌にはどんな汚れが誰から出て入って居るだろうと思うといくら新らしい湯に最初入ってもいやである。とうとう私の居る間は立て廻しから抜けてもらう事にしたけれ共、小学校の先生の家の人や、あの

「おともさん」は立つ毎に来て入って行つた。これ共はこばむ事の出来にくい人達だつた。その晩は校長が手拭をドテラの上から帯の様にして湯に入りに来た。

十五分もかからないで上ると私共の炬燵に入つて、会津の方の女の話をした。非常な働き者で、東京の娘達の様に箸より重いものは持てない様には必してして居ないと殊更、私にあてつけでもする様な口調で云つた。先生と云う臭味がこんな時プーンとする。私はだまつてきいて居る。祖母はおつとめにじいつとしてきいて居るらしく時々妙な質問を出して先生をどぎまぎさせて居た。私のだまつて居るので、いろいろの事に話が渡つて、しまいには、女に女学校以上の学問を養わせる事や、専門的な智能を養わせる

必要はない。学問などをするから男を馬鹿にしてかかるなどと云つて居た。時々、私をかあつとさせる様な事を云う。まるで私とすっかり違ふ頭の人に自分の考えを発表した処で無意味だし、又それほど抜けても居なかつたから、時々いやあな顔をしながらも一言も返さずにだまつて只きいて居た。一段話すと、祖母は梅の汁が自然に発酵した酒を進めた。私も一口なめて見たけれ共、舌の先がやけそうにヒリツとした。随分つよいらしかつた。

校長は小さい猪口に三四杯飲んですっかり機嫌になり、自分等が若かつた時、寄宿舎で夜中に食物をとりに行つて小使だと思つて舎監にソーッと醤油を呉れと云つて、それなり懷に一杯薯を抱いてつかまつた事を、顔中の和毛をそよがせながら話した。そし

て炬燵布団に、髯もじやの顔を押しつけて居眠りを始めた。祖母は笑いながらゆり起した時、見事な髯に白く「よだれ」のしずくがたった一つつつましげに輝いて居た。その「よだれ」のしずくはすっかり私の氣持をやわらげて仕舞った。

翌日とその翌日とかかつてすっかり雪解はすんで仕舞った。正月も迫つて来た。けれ共、新、旧と二つの曆をつかつて居る此村では新と旧と二度正月があるので、両方ともが割合にざつとすまされるのである。別にこれぞと云うほどの事も、この村ではして居ないとは云うものの、荷馬の背に新らしい下駄や一寸した家具がつんであるのも、やっぱり、あらそわれない暮らしい氣持がただよつて居る。ほんとうに、暮の氣持がただよつて居ると云う位

のもので、あの一番せわしない、掛取りや、来年の準備に必要なものを景気をつけて売って居る商人やの姿が見えないから、いかにもしずかに自然に年の暮が立って行く。十二月の末、それはこの上なく日の短かい寒い時分なので、正月の買物に町へ出掛けるものさえ少ないのである。

東京の友達からはクリスマスの事等を云つてよこした。ほんとにもうクリスマスも「あさつて」になった事だと思うと、今更、正月が近い内になったのに驚く。東京に居ればこそ、小さい兄弟に、贈物をしたり、外からもらつたりしてクリスマスを忘れる事はないけれ共、此んな処に来て居るとクリスマスの「ク」の字さえ口に出ないので、私も忘れ気味になって居た。暮を知らない様

に静かな此村で、年越しをするのもおだやかで好いだろう等と思う。

町へ雑誌と、書く紙を買いに行こうと思いながら、寒さにめげて一日一日とのぼして居たが、歳暮売出しを町の店々は始め、少しは目先が變つて居るからと云う事で、芝居ずきの「御ともさん」とお繁婆と女中とで午前の日が上りきつて、暖い時に出かけた。

頸えりまき巻はいくら毛でも鼻の先がひどくつめたい。祖母は、足袋

の先に真綿を入れて呉れたので足はいくらか暖かい。一本筋の高い処にある道を、静かながら北の山からすべり落ちて来る風にあらいざらい吹きさらされて、足の遅いのろお伴つれと一緒に、私はもうちつと早く歩きたいもんだなあと思ひながら歩いて行く。道はまだ、

こちこちに凍った様になつて居るので下駄が少し強くあたると破れそうな音をたてる。二枚重ねた銘仙の着物の裾がボタボタと重い。頭巾をかぶつて来ればよかつたとも思つた。「御ともさん」は東京弁と、此村と山形——米沢の言葉をとりまぜた言葉でしきりに私に話しかける。芝居は好きか、どの役者が一番好いか、東京では、どんな外題がもてるか。婆さんの話と云えば芝居の事ばかりである。けれ共、私の返事は皆婆さんには満足を与えなかつた。何故なら、お婆さんのきく様な氣持で好い役者、悪い役者に氣をつけた事もなし、毎日の事に追われて居て、換り毎に出かけるほどの時を持つて居ないから処々での出しものも知らないのが多い。

「東京に居なさるから、毎日毎日芝居見てなさるべえと思つて……。お嬢さんなごあ、御しやらく（御めかし）して毎日毎日遊んで居なされる身分さ。

婆さんは、私の家に、金となる木があつて、私は不死の生をさずかつて居るとでも思つて居る様な口調で、スラスラと「何のこれしきの事」と云う調子で云う。

「ほんにそうだのし。

浅黄の木綿の大風呂敷を斜に背負つて居るお繁婆さんは、背のものをゆすりあげて合づちを打つ。

この人達は何故、私がそんな立派な御身分に見えるのだらうと思ふ。あんまり平常、尊がられもせず、往来を歩いて、私を知つ

て見るものは一人もなく、自身も亦、知られるべき筈のものでないと思つて居る私が、此処に来て持ちあげられると変な気がする。腹が立つのではないにきまつて居るが、何だかいかにも皮肉な様な、間の悪い様な、くすぐつたい気持がする。けれ共、あんまり自分達の世界と私達の世界を違えて考え、何の苦勞も努力もしずにのらくらと暮して居る様に、馬鹿馬鹿しいほど云いたてると、仕舞いには私は腹をたてて仕舞う。その時も私は歩きながら大つまみに東京の生活振りを話してきかせた。皆は東京と云えば明るい方面ばかり見て居るので容易に私の辛い、みじめな生活の有様を信じない。

長い長い田圃道を通りすぎて町の一番はじにある傘直しの家の

前へ来た時には、お互に気持のわかりにくい私共はもうだまり返つて只セツセと歩いて居た。顔が赤くなつて、赤い顔の中央から白い湯気のような息が立つて居る。お繁婆さんは、手拭を出して頸の廻りを拭いて居る。郡役所の下へ来た時にはもう、間の抜けた楽隊の音が聞え出し、停車場から荷物を持って来る配達が私の顔をにらんで通つた。思わず私は顔を一撫でして女中と顔を見合せて笑つた。婆さん連は、端折つて居た裾を下した。広い町の両側の店々の飾りを見て歩いた。

よく見世物の小屋に立つて居る様な幟りに「歳暮大売出し」

「大々的すて売り」「上等舶来、手袋有」などと書いたのがバタバタ云つて居る。東京で歳暮の町を歩いて一番目につく羽子板

等はあんまり飾ってなく、あれば色取った紙を板にはりつけた二三銭のか、それでなければ八重垣姫や助六等を粗末な布で押し絵にしたものばかりである。凧の方がまだ見事に書いたのがある。まだ小学があると見えてそう子供は居なかったけれ共、十四、五からの娘達が頸巻をし、手を懷に突込んで、雜貨店だの呉服屋の店先に群らがつて居る。大抵は日本髪にして居る。此処いらの人から見れば、随分はでに見える着物を着て、大股にスタスタ歩く私を、いつまでも見て居るのが氣に障った。化粧品店には、あざやかな掛ける人もないリボンや新ダイヤの入った大きな櫛や髷たほど止めが娘達の心を引いて光つて居る。

「おともさん」が縫いあげた、帯だの、着物だのの賃銀を主屋の

方に行つてもらつて居る呉服屋の店先で、私は祖母の胴着と自分の袖にするメリンスのこぎれ小布を見て居た。出すのも出すのも地味なのばかりなので、私は袂を出して見せて、こんな様なのを見せて呉れと云つた。番頭は早口に遠慮なく出させる私を、変な顔をして見た。褪紅色の地に大きな乱菊を出したのと、鶯茶の様な色へ暖い色の細かい模様を入れたのを買うと、あつちの隅でお繁婆さんは、出来上つて居る瓦斯の裨天の袖を引っぱつて居たので、せかせまいと女中の見て居た裨衿と一緒に見る。赤味のかかったうすい茶色の厚い紬の様な地の裨衿があつたので、その模様を太い綿糸で縫いとして本の表紙にするつもりで買つて仕舞つた。

その店を出た時お繁婆さんの背中の風呂敷は少しふくれて居た。

中にはさっきの絆天が入って居るのだ。「おとも婆さん」も何となしゆとりのある顔をして居る。皆、相当に満足しててんでになり重いものを持って家へかえったのは午後もかなりになつて居た。私と女中は二人とも重いものをさげて居る。村の酒屋からの酢は中が割つてあるので買つて来たビール瓶をさげ、砂糖と洗濯シャボンと髪の毛の油と、そんなまとまりのない散り散りになるのを持つて居る女中は、絶えず両方の手で仲の悪い互々を巧くまとめなければならず、反物を二三反と本をかなりと菓子包をもつて居る私とは、重い思いをしながら二人の婆さんに別れると、家まで笑いつづけて来た。

祖母の顔を見るとすぐ、

「御隠居様、『おともさん』は……」

と一層はげしく笑いこけながら、呉服屋からうけ取った金を小口から買物にはらったのだけれ共、一度代だいをはらうと、黄色い財布からチャラチャラと一つあまさず出して、すっかり勘定をしてからでなければ仕舞わない。幾度でも幾度でも繰返して、私共をやらに待たせたとその錢を勘定する手つきまでして見せた。祖母は、

「あのお婆さんは、今夜きつとその財布をお臍へそにあてて寝るんだろうよ。あした目が覚めて見るとお札がむれて、かびだらけ。等と云ったので、買って来たものを見せもしないで、はめをはずして笑って仕舞った。その時から女中はあの人の事を「お臍のお

札」と云う名にして居た。けれ共それは、家中三人ほか知る事ではなかつた。

二十六日の日に東京から、菓子と果物と「鳥そぼろ」がついて、同じ日に十二月分の国民文庫が届いた。

夕方、源平団子と云う菓子屋で餅をつかせて呉れと、こぼれそうな腹をした主婦が手帳と鉛筆を持って来た。家で食べる分は少しでも、食べさせる分が沢山いるので、納屋から二斗もちごめを計ってやって居た。此処いらの家では大抵自分の家でつくので、中学の教師の家だの何かでそう沢山頼まれもしないのだそうだ。若し出来るなら「のし餅」にしてくれないかと云つたら、お雛さんの時の、菱餅の様になら出来ると云うので、それをもう少しう

すく四角く大きくして呉れと云つてやる。寸法と厚さを持つて来た帳面に書いてやる。わかつた様にうけ合つて行つたけれ共、どんなものが出来上るやらわからない。あの手で千切つたベロベロの餅は、小さく四角にきちんと切つた餅を澄んだ汁の中に入れてばかり食べる癖がついて居るので、とうてい餅らしい気持でのみ込む事は出来ない。祖母と女中はお年玉にやる子供の着物や「ちやんちゃん」を縫うのにせわしく、箆笥の下の引出しには元結だの風呂敷、絆衿、前掛地の様なこまましたものが一杯になった。三十日の日に煤掃きを若い者の居た時はさせたと云う事だけ共、女ばかりで、寒いのにガタガタするでもない、三、四月の暖くなるまでのばして、外廻りを村の者に一通り掃いてもらった。

いつもいつも煤掃きじや、障子の張りかえじや、自分の部屋の大掃除とセカセカして二十六日後落ちつく事がないのに、いつもどおりに変りない静けさに居る事が不思議な様な又、間のぬけた氣持がする。

つめの日に夕方甚五郎爺が来た。鶏を一羽と卵と菜を沢山置いて行つた。

裏の竹藪から二本の竹を切り、庭の隅の松の枝を雌、雄二本下して、麻繩のきれいなもので七五三に結びあげ玄関前に立て、水口の柱に枝松が釘で打ちつけられた。皆甚五郎爺の手際である。風呂を振舞われ、地酒によつて四斗俵を四俵運べた若い時の力を自慢したりした。祖母は七十より四つ五つ上になつた自分の年を

数えていろいろの事に出会った思い出を話し、

「もう私の様になってからはもうだめだ。

と云いながら、まだ肩や腰が痛い位で壮健で居る自分の体が嬉しい様に微笑んで居る。非常におだやかに来る人もなく、ぼんやりと大晦日が更けて行くのでいつもよりのびやかに次の年を迎える気持が嬉しい。

(七)

非常に天気が良い。

田畑の面のはてしない広い処に太陽がゆったりと差して、黄金

色の細かい細かい粉末が宙に入りみだれて舞つて居る様に見えて居る。立木の陰、家の陰などは濃くたちこめた靄もやそのままの紫っぽい色がただようて、枯木の梢の太陽が四方に放散する。紅の輝きの流れが見られる様である。

雪降りの日の様に見えるかぎりには真白で散り敷いた落葉の裏表からは絹針より細く鋭い霜の針がすき間もなく立つて居る。その痛いように見える落葉をつまむと指のあたった処だけスーッとつけて冷たくしみて行く。葉の面を被うて居る針は、見れば見るほど面白い結晶体で、山の様な、谷の様な、花や鳥又は一寸法師の様な形まで、せまつくるしい細かい処に表わして居る。樹木の影が地に落ちて、はでな縞目をつくり、処々に小石が宝石の様にか

たい反射光線を出して居る。外の景色ものどかならば、人々の氣持も静かである。元日だと云つても別に之ぞと云う東京ほどのにぎにぎしさもない。

来る人も少ないし、女家内でもあるのでおとそなんかも少しほかない。一盃おとそを飲めば後は熱酎でなければ飲んだ氣のしな
い此処いらの連中のために酒が珍らしくまとまって台所にある
れ共、それも、女ばかりの処であんまりお心よくして、酔いし
れて、管^{くだ}でも巻かれると始末が悪いと云つて加減がしてある。

祖母と私は紋の附いた羽織を着、女中も、仕立下しの立ったり
居たりするたんびにカサコソと音をたてる様な着物を着て、赤っ
ぽいメリンスの帯を、柔くたきすぎたお萩の様にまとまりの悪い

デロリとした形恰に結んで居る。顔の処々に淡雪が遺^{のこ}つて居る。平常、あんまり黒つぽくて居て、急ににぎやかな色をつかうので、そんな年でもないのに、いかにも釣合の悪い様子に見える。女中ばかりが、いかにもお正月を迎えた様だ。

校長の家の妻君は、紬の紋附を麗々しく白衿で着て居る。ふだんのかまわな^{なり}いなりの方がその人を可愛らしく見せる。田舎田舎するのが却つて目立つ。

年始に来る者も来る者も女まで、赤い顔をして居る。皆それぞれさっぱりした装^{なり}をして袴をはいて居るのもある。いつになく儀式ばった様子で来るので箸のあげ下しにも氣^{つか}を用つて居る様に見える。

年賀の言葉なんかも半分位云つて後はのみ込んで仕舞う。あと

来るものも来るものもおとそとお重詰とを食べて行く。

「もうはあ、いただかれませんかハイ。

と云いながら、出したものは食べる。

日露戦争に参加して、斥候に出て捕虜になつた在郷軍人は、東京の家の書生の兄弟で、いい機嫌で、その時勇戦奮闘した様子を
手まねまでして話した。

沙河附近の戦の時だったそうで、

「そりやあ、貴方様、見事に働きましたぞえ、そんじやから、足片方なくしても、やつにとつつかまりさえしなんだら、金きんしは目をつぶつててもはあ落ちて来ますのし。そうよ。溝ささか

しまに、落ち込んだばかりに、聞きたくもない捕虜になどな
つて、この次の戦さあ出たら、首の三つ四つは朝めし前のお土
産だつし。

肩をゆすつていかにも頼もしい様子をする。この男は、夏にあ
る点呼の時にいつでも、厚い冬着を着て行つて、湯をあびて帰つ
て来るのが常だ。何故そんなひどい思をするのかときく人がある
と、

「戦の時ときあ、夏と冬の入りまじつた時があるかない、夏に
なつたとて、衣裳換え出来ねえ時はあるし。

と云つて居る。顔の造作の小さい茶色の頬骨のとび出た男である。
肥料を自分の畑ばかりへ、沢山やると云つて、祖母はあんまり

よくは思つて居ない。一杯の酒を一時間もかかつて飲む。おできのあとか何か、頭の殆ど中央に一錢銅貨位のおはげがあるのが皆をやたらに笑わせる。ロシア人はパンをくれと云う事を、

メリゴスゴス

と云うと私に教えた。そんな事はないだろうと云つてもきかない。私のきいたのに間違の有ろうはずがないと云つて居る。

この男が帰ると甚五郎爺とおともさんがつれだつて来る。二人とも、あんまりさっぱりした装をして居ない。おともさんはその男の後姿を見送つて、その丸々した肩をすぼめて一寸舌を出した。祖母の前に来ると、二人ともがやつこらと先ず膝について、それからゆるゆるとお辞儀にかかるので、

「いいおひな様だのし。

と祖母が笑う。

「ほんによ。この婆さまにやあ、己が似合わしいと。ハイ、ま
ず明けましてよいお年でござりやす。

二人して、いろいろの事をしゃべり合つて居る。祖母は、だま
つて笑いながら聞いて居る。炉の前にチンと座つた祖母の紋八二
重の黒い被布姿がふだんより上品に見える。どうしても年よりは
被布に限ると思つて私は傍^{わき}から見て居る。

おともさんは又、もうこの四日に掛ると云う春興行を見たがつ
て居る。

「貧亡してても芝居は見たいものと見える。あんまり芝居ばつ

かり見たがつて居るからあんな苦しい暮しをするのだて。

と祖母は、おともさんがもらつた真綿の胴着を抱えて喜んで歸つて行つた後でしみじみと云つて居た。年を取つてから貧しい生活をして居るものを祖母は一層同情するらしい。自分の身に引きくらべてでもあらう。

夕方近くなつてから牛乳屋の人と、あの先^{せん}に私に石を投げた甚助の家の男の子が母親と一緒に來た。

私はその児を見ると「オヤマア」と云つた様な氣になつたし、その子も間が悪いと見えて母親の陰に顔を引つこめて仕舞う。紺の筒袖を着て、拇指の大抵出た足袋をはいて居た。母親は水をつけて梳いた櫛巻きにし、幾度か水をくぐつた、それでも汚れてだ

けは居ない着物を哀れげに着て居る。低い声で入口に立ったまま
お喜びをのべ、

「お目出度う、ござりやすと云うものだぞえ、これ。
と、はにかんで居る男の子の頭を平手で押しつける。

ポクリと否応なしに頭をさげると男の子はすぐ母親のそばをは
なれて門のわきに行つて仕舞つた。祖母は、二三枚の着古しの着
物と足袋と、子供に何か買つてやれと少し許りの金をやった。女
は、私が気恥かしい思をするほど丁寧に礼をのべて、門柱の処か
らこつちを見て居る男の子をさしまねいて、

「何か買えとお金を下すつたかない。お礼云うだ。

男の子はまたポクリと首をまげて、クドクド何か云う母親の

手を引っぱって帰って行つた。門の処で振返つてこつちを見た、男の子の、悪図々しい様な、憎々しい目の色を、私はいつまでも覚えて居た。

歌留多をとるでなし、人の訪ねて来るでもない、寒い夜は、早くから炬燵に入つて、いかにも雪国らしい、しずかな時を送る。

此処いらの正月は、盆よりはにぎやかでない。正月は、ひどい寒さでもあるし、^{たくわ}蓄えの穀物があんまり豊かでない時なので、貧しい村人は盆をたのしみに、晴着をつくりたい処も、のぼしておくのである。

元日に年始に來ないものは大抵二日になつても來ない。その來ない人達は、旧の正月を祝うのである。東京に居て他家へ行つた

り来られたりしてすぐす七草まで位の日は大変早く、目まぐるしいほどで立つて行くけれ共、此処の一日は、時間にのび縮みはない筈ながら、ゆるゆると立つて行く。

東京の急がしい渦が巻き来まれて、暇だとは云いながら一足門の外へ出れば、体中の神経に、はげしい刺激を受けなれて居るの
で、あんまり静かにのびやかに暮して居ると、日一日と体中の機
関が鈍って行く様に思われる。実際鈍って行くのかもしれない。
道を歩いて、ポツリポツリとほか人に会わなかったり、たまに
ガラガラ人力がすれ違う位では、のびやかだと云うのも一月位で、
あとは、物足りない、何となく隙のある様な感じを与えられる。
眠ったまま正月もたって行く。羽子を突く音もしなければ、風の

うなりもきこえない。子供達は、何と云う名なのか知らないけれども、地面に幾つも幾つも条すじを引いて、その条から条へと小石を爪先で蹴って行く遊びを主にして居る。首に毛糸で編んだ赤や紫の頸巻の様なものを巻きつけて懷手をして、青っぱなを啜り上げ啜りあげ、かさかさな顔をして広い往還の中央にかたまつて居る。犬同志をけしかけてけんかをさせたり、猫に悪戯をしかけたりして居る。

女の子は、一本三四銭位の花かんざしをさして、やっぱり頸巻をまきつけて、菓子屋の店先だの家の角かどなどに三人四人とかたまつて、何か話したり、砂利を入れた木綿の「石なご」（お手玉）をしたり、石のおはじきをしたりして居る。木綿の着物にメリン

スのお立てなんかにして居るので、妙に釣合が悪くて見つともない。

「きいちやんの帯いいんだない。どこさから買ったのけえ。

「これけえ、

伊勢屋げからよ。

お蚕様の時、偉え働いたちゆうて買^こうて呉れたのし。

この地方特有の妙に、しり上りの口調で話してなんか居る。

こう云う処に居ると、私と似寄りの年頃の話し相手はまるで出来ない。言葉の違^せう故か、きまりを悪^せがつて、どんなに私が打ちとけても口一つきかないのである。それにまた、この村には割合に、娘や若い男の子が少い様に見える。中学校に来るものは大抵

他処のものなので、学校の休中は大変に静かになって居る。私が話しかけて快く返事をしてくれるものは大方、年とったものか、女房になったものでなければならない。此処いらの一体の子供が、はにかみやのくせに悪口をつくから、何だか私にいい感じを与えない。

町の三つに分れる処にある床屋には、沢山若い百姓が集って居る。

極く極く質朴な処が若い百姓には少なく、金のある時に町へ行って買いためたハンケチだの、帯だの、ニツケルの時計だの、指環だのをあらいざらい身につけて、新銘仙の着物等を着て居るのが多い。節くれだった小指に、鍍金めっきの物々しい金指環をはめて

居たり、河^{かつ}ぱの様にした頭に油を一杯つけて、紫の絹のハンカチでいやらしく喉を巻いたりして居る様子は、ついしかめつ面をするほどこいやだ。何故こんな様子がしたいんだろう。純粹の百姓の様子で何故いられないのだろう。都会の、借金して縮緬の紋附を着る浅ましい氣風がこんな山中にまで流れて来て居るのだろう。

教育家でなく、宗教家でなくても、いやな事だと思ふよりほか仕方がない。斯うやって、鍍金の指環をはめたい男達は、自分の能力を考えもせずに都会の派手な生活にあこがれて、上野の停車場へ降^おりさえすれば、目の前に金のもうかる仕事^おが御意のままにころがつて居ると思つて居る。それほどに思つて居ないにしても、とにかく、非常に易々と成功を遂げられるものだと思つては居る

に違いないのである。

娘でも、東京へ出て一二年奉公でもすれば、立派な奥様になりあがつて、明日はこの芝居、その次の日は何の会と歩き廻れるものの様に思つて居る。都会の奥様は、日髪、日化粧で、長火鉢の前で鉄瓶の湯気の番人をして居ればすむ様に思つて居る。

東京——都会の生活を非常に理想的に考えて居る事、都会に出れば、道傍の石をつかむ様に成功の出来るもの、世話の仕手が四方八方にある様に思う事、食うに困る事等はない様に思う事等は、東京の生活をしたものがあんまり馬鹿馬鹿しいと思う位いに善い事づくめに想つて居るのである。^{おも}東京を見た事もないで、どうしてそんなに善いとばかり想つて居るかと言え、東京見物に行つ

たものの土産話しと、雑誌の記事写真によるのである。

農業休みに十日か二十日の東京見物に出かけたものは、只にぎやかな町の様子、はやしたてて居る見世物、目のさめる様な店飾りにイルミネーション、立派な装で自動車を飛ばせて行く人、ぴかぴかに光った頭の婦人、その他あれやこれや、只もうにぎやかなパツとしたむく鳥おどしに仕掛けてある事にまんまとおどされて、刺激の少ない処に居て急にさわがしい処に出たので、いいかげん頭が熱くなつて、自動車、電車に幾度か「きも」も消して、何の得る処もなく、

「いやはあ、東京ちゆう処は、はあ偉えこんだよ。

と帰って行く。耳のそばで十の金^{とお}だらいを一時にたたかれた様な

ガーンとした気持ちで帰って行くのである。そうしてする土産話は、にぎやかな派手な自動車の事や、三越で何百円とする帯を買って居た奥様の話ばかりである。

雑誌は雑誌で、一文なしで上京して大臣の椅子を占めた人の話や、苦学して博士になった人の話やが山ほどある。若い者の奮発心を起すにはこの上ない事ではあるが、一文なしで上京して大臣になった人などは、大抵維新の時にそのきわどい運命の瀬に立つた人ばかりである。義務教育をすましたばかりの若者の頭には時代と云う考えがない。すっかり秩序的になった今の世の中を維新当時とごたまぜにして居る。そして、自分も大望を抱いて東京へ飛出しは飛出しても、半年位後にはやせてしおしおと帰って来る

か、歸るにも歸れない仕儀になつたものは諸々方々に就職口をさがしあぐんだ末、故郷の人に会わされない様なみじめな仕事でも、生きるためにしなければならなくなる。

東京を一寸も見た事のないものに東京を紹介する雑誌は、責任をもつて着実な考えで東京を知らせ、良い処よりも悪い裏面を多く知らせた方がまだ不難だろうとさえ思われる。田舎の若者が、皆が皆東京へばかり出たがつて仕舞つては、ほんとうに困る事だろうと思う。

農民はたしかに低級な趣味と智能を持って居るばかりだと云つて良い。けれ共、農業をする事の大切だと云う事を農民自身に感じさせたいものだと思う。東京へ東京へと浮足たつて居ながらす

る農業は、目覚ましい発達を仕様はずがない。東北の農業の振わないのは、農事の困難なため、都会へ都会へと皆の気が向いて居る故^{せい}でも有ろうと思われる。西国の農民は富んで良い結果をあげて居る。農作に氣候が適して居るので、農事に興味があつて、自分が農民である事に、満足して、自分の土地以外に移つて新しい職業を得様などとはあんまり思つて居ないらしい。東北は氣候が悪い。農作の結果があまりよくない。それにしたがつて興味もうすいわけだが、農業にしたがう事は、大臣とかわからない、大切な立派な仕事であると自覚し、はたでもまた、雨につけ、風につけての心づかいを思いくむ様にしなければいけないと思う。

とにかく、東北の農民、——これから進歩した農業を仕なけれ

ばならない筈の若い者が、自分の故郷、仕事をはなれたがつて居る事は、真にいとわしい事である。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「多喜二と百合子 七号～十三号」多喜二・百合子研究会

1954（昭和29）年12月～1955（昭和30）年12月発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

農村

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>